

第93図 土坑15～17号出土遺物

埋土中から弥生土器8点と縄文土器2点が出土した。その中で2点を掲載した。470は、甕の緩やかに内湾する口縁部である。口縁部と胴部に刻目突帯を貼り付けるが、下部の貼り付け方は粗い。471は甕の胴部片で、刻目突帯が巡る。470・471は、弥生時代前期に比定できる土器片である。472は深鉢の口縁部で、端部がやや外反する。3条の浅い沈線を平行に施す。縄文時代後期の指宿式土器であると考えられる。

土坑25号 (第95図)

B-19区、Ⅲ層で検出された。土坑24号に南西端を切られる。長軸0.37m、短軸0.26m、深さ0.2mを測る。

埋土中から弥生時代と考えられる胴部小片が5点出土

したが、図化し得なかった。

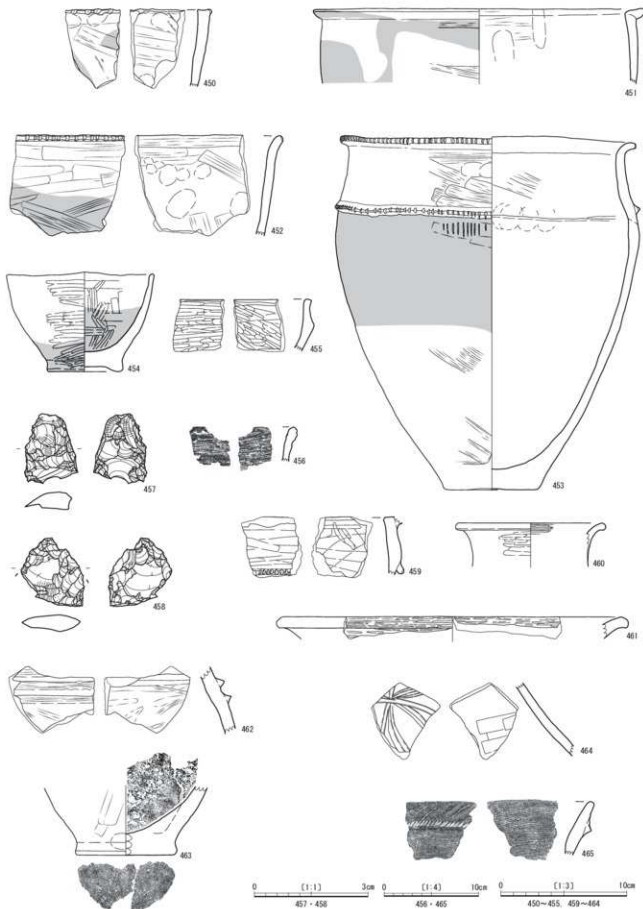
土坑26号 (第95図)

B-19区、Ⅲ層で検出された。土坑24号の北西約0.5mに位置する。長軸0.77m、短軸0.48m、深さ0.25mを測る。不定型な形状でⅢ類に分類した。底面は西側でもう一段掘り込まれる。

埋土から土器片が1点出土した。473は、口縁下半部分である。大きく外反すると考えられるが、口縁上半部分は欠損する。沈線で直線及び曲線を施す。縄文時代後期の指宿式土器である。

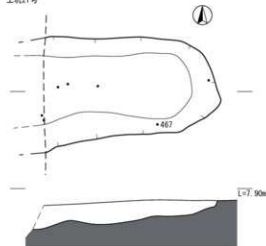
土坑27号 (第95図)

C-17・18区、Ⅲ層で検出された。長軸1.36m、短軸



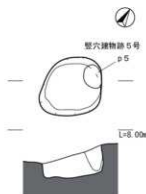
第94图 土坑18~20号出土遗物

土坑21号



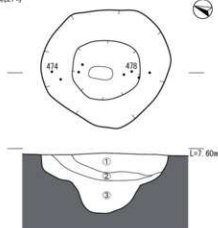
埋土
暗赤褐色土 淡黄褐色砂質土を少量含む。
鉄分の浸透により、全体的に赤みを帯びる。
しまりはあるが、粘性は弱い。

土坑22号



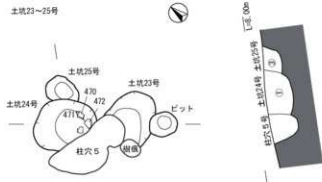
埋土
黄褐色土 明黄褐色土を少量含む。
しまりは強いが、粘性は弱い。

土坑27号



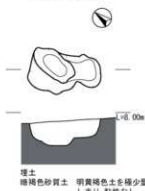
埋土
①暗オリーブ褐色土 赤褐色の鉄成分とにぶい黄褐色小バミスを極少量含む。
しまりは強いが、粘性は弱い。
②暗灰褐色土 赤褐色の鉄成分とにぶい黄褐色小バミスを極少量含む。
しまりは強いが、粘性は弱い。
③暗褐色土 赤褐色の鉄成分とにぶい黄褐色小バミスを極少量含む。
しまりは強く、粘性もある。

土坑23～25号



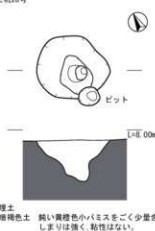
埋土
①暗褐色砂質土 明黄褐色砂質土を極少量含む。
しまりは強く、粘性はない。
②暗褐色砂質土 明黄褐色砂質土を少量含む。
しまりは強く、粘性はない。
③暗褐色砂質土 明黄褐色砂質土を極少量含む。
しまりは強く、粘性はない。
土坑23号の埋土と同じで、土坑24号の埋土より黒味が強い。

土坑26号

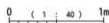


埋土
暗褐色砂質土 明黄褐色土を極少量含む。
しまり、粘性なし。

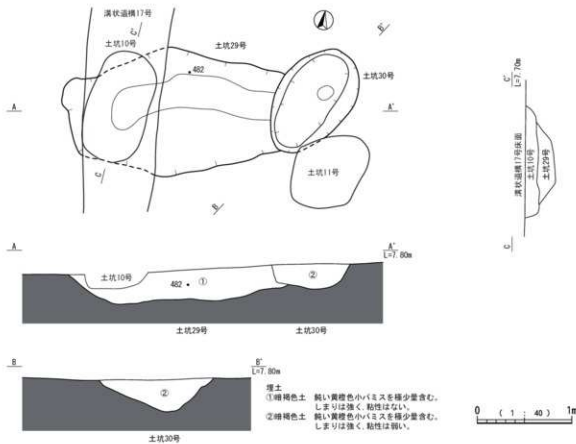
土坑28号



埋土
暗褐色土 鈍い黄褐色小バミスごく少量含む。
しまりは強く、粘性はない。



第95図 土坑21～28号



第96図 土坑29・30号

1.24m、深さ0.63mを測る。I類に分類される。底面のほぼ中央部は長軸0.7m、短軸0.6mの範囲で、さらにもう一段掘り下げられる。

埋土中からは、40数点の遺物が出土した。多くが弥生式土器の胴部片で、他に17~18cm大と10cm大の礫、黒曜石の剥片等が出土した。474は、甕の口縁部である。口縁端部が外反し、口唇部に刻みを施す。弥生時代前期の土器と考えられる。

475~478は、縄文時代後期の深鉢である。475は肥厚させた口縁端部を外反させ、内面には稜をもつ。幅広い口唇部にはヘラ状工具による刺突で羽状の模様を施す。476は粘土を貼り付け、口縁部断面を三角形に肥厚させ、斜位の貝殻刺突文を連続して施す。市来式土器である。477・478は、深鉢の底部である。477は、底径9.2cmを測る。底面には白色土が付着し、鯨骨と考えられる圧痕が観察される。478は、底径12.6cmを測る。底面には白色土が付着し、木の葉様の圧痕が残る。

479は、軽石製品である。風化が著しく詳細な観察はできないが、正面と裏面に平坦面を作出する。また、正面には、筋状の細い溝が連続しており、裏面には、浅く幅広い溝が縦方向に観察される。下面は、切り取られたような平坦面となる。

土坑28号 (第95・97図480)

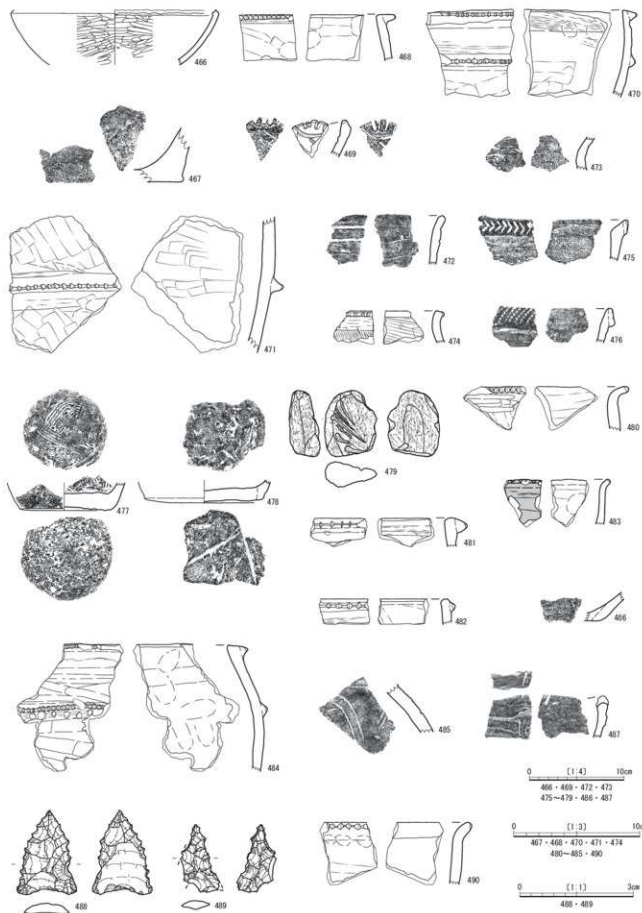
C-17区、Ⅲ層で検出され、土坑27号の東側約10mに位置する。長軸0.77m、短軸0.66m、深さ0.42mを測り、I類に分類される。床面中央はさらに掘り込まれる。

埋土中から土器片7点と黒曜石や安山岩の剥片等が出土したが、うち1点を図化した。480は、如意形口縁である。口縁部は端部で大きく外反し、口唇部には刻みが施される。弥生時代前期に比定される。

土坑29号 (第96・97図481~489)

C-17区、Ⅲ層で検出された。東端を土坑30号、西側を土坑10号で切られる。残存する長軸2.21m、短軸1.35m、深さ0.3mを測る。全体的な形状が不明で、Ⅲ類とした。床面はほぼ平坦で、断面は皿型に近い。本土坑を切る土坑10号は、溝状遺構17号の掘り下げ中に床面から検出されている。

埋土から100数点の土器、石鏝等が確認された。土師器の小片も出土したが、混入と判断した。481~484は、甕である。481は、口縁端部に断面三角形の剥目突帯を貼り付ける。482は、高さの低い剥目突帯を口唇部からやや下方に貼り付ける。483は如意形の口縁で、口唇部に刻みを施す。器壁は薄く、外面にススが付着し、内面は黒化する。484は、内湾する口縁部外端と胴部に刻み



第97图 土坑21·22·24·26~30号出土遗物

第2節 遺物

1 概要

縄文時代晩期から古墳時代の遺物を包含するのは、基本的にⅡ層である。古墳時代の遺物は低地部の21区から23区と25区で出土量が多かったが、低湿地帯での出土量は少ない。弥生時代の遺物は、18区から29区にかけての低地部で出土量が多い。縄文時代晩期の遺物は低地部を中心に、特に25・26区に集中して出土した。7区から15区にかけての低湿地帯からの出土は数点であった。

木製品に関しては、30点を掲載した。木製品は、ほぼ8区から15区にかけての低湿地帯からの出土である。出土層は泥炭層のⅡb層であるが、木製品自体及び出土層から時期を特定することはできなかった。そこで、30点の木製品の放射性炭素年代測定を行った結果、古墳時代の木製品3点、弥生時代の木製品が27点であった。自然科学分析の詳細については、第8章（第3分冊）を参照していただきたい。

なお、時代毎の遺物及び木製品の出土状況については、第98～101図に示した。

2 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は、土器と木製品を図化し掲載した。土器の出土層はⅡ層であるが、一部表層とⅢ層のものもある。木製品の出土は低湿地に限られ、放射性炭素年代測定の結果に従い、3点の木製品を掲載した。

(1) 土器

出土した土器の器種は、甕・壺・蓋・鉢・高坏・埴等である。出土量が多くないため、器種毎の分類は行わなかった。以下、器種毎に記述する。

ア 甕 (第102図491～505)

491～498は、甕の口縁部もしくは口縁部から胴部まで残存するものである。口縁部は外反し、胴部は影らむ器形をもつ。491～493は内面の口縁部と胴部の境の境が明瞭で、494～496は不明瞭である。491・494・495の口唇部は丸く収め、他のものは断面が方形となる。491は内面の境も明瞭で、器面調整のハケメ痕が残る。492は、口縁部と胴部の境には段をもつ。495の口唇部は波状に歪み、外面にはススが付着する。497の胴部はあまり影らまず、長胴になると考えられる。498は、口縁部に施された縦位のハケメが顕著である。外面の一部が被熱により剥落し、ススが付着する。

499～505は、甕の脚である。「ハ」の字状に開く脚の端部は丸く収める。502は、高坏の可能性もある。504・505は、刻目突帯をもつ脚である。いずれにもぶい橙色を呈する。

イ 壺 (第103図506～514)

506～514は、壺である。外反する長めの口縁部は頸部で締まり、肩部はあまり強らず胴部に至る器形となる。506・507は口縁部が強く外反し、509・510の外反は弱く

なる。506は緻密な胎土で、成形も丁寧である。外面は縦方向のハケメを施した後、ナデ消している。口縁部内面は横方向のナデが丁寧に行われる。507は器面が摩耗しているが、ハケメの調整痕が観察できる。508は、最大径を胴部にもつ。外面は全面にハケメを施した後、ナデ消しを行う。口縁部内面はナデ、胴部内面はハケメで器面調整を行う。509は、508と同じような器形で口径も似る。外面の調整は、ハケメが残らないようにナデ消している。510は口縁部片であるが、調整は508・509と同じである。

511は、胴部片である。胴部中央部付近に2本の凹線を平行して巡らせ、凹線間を見かけ上の突帯とし、そこに浅い刻みを施す。外面には縦方向、内面には横方向のハケメが残る。

512～514は底部で、いずれも丸底である。512は胴部から底部が残存し、刻目突帯が胴部を巡る。器形は、胴部が影らまない長胴と考えられる。外面はケズリとナデ、内面はハケメとナデで器面調整を行う。焼成は堅固であるが、器面調整は粗い。513の底部投地面が、径25cmほど平坦となる。外面はハケメ調整である。

ウ 蓋 (第103図515)

515は、蓋である。摘み部分から直線的に伸びる器形は底部で外反する。底部内面の屈曲する付近に付着したススが一周し、外面にもススが付着する。内外面とも被熱による表面剥離が部分的に見られる。蓋を転用して鉢としても使用したと考えられる。

エ 鉢 (第103図516～520)

516～520は、鉢の口縁部と底部である。516は脚部と口縁部から胴部にかけて土器片で接合しなかったが、色調・胎土・器形・器面調整等から同一個体と判断した2点を図上復元したものである。低い脚部からやや影らみながら立ち上がり、口縁部が外反する器形となる。内面の胴部以下は表面が黒色化する。外面はケズリ・ナデ、内面はハケメ・ナデで器面調整を行う。517は、胴部が影らみをもちながら直立する口縁部へと至る器形である。口縁部部の器壁は、かなり薄くなる。脚部と胴部は別々に作成した後、はめ込んでいる。外面には、器面調整のハケメが明瞭に残る。518は516と似たような器形をもつが、器面調整が丁寧である。

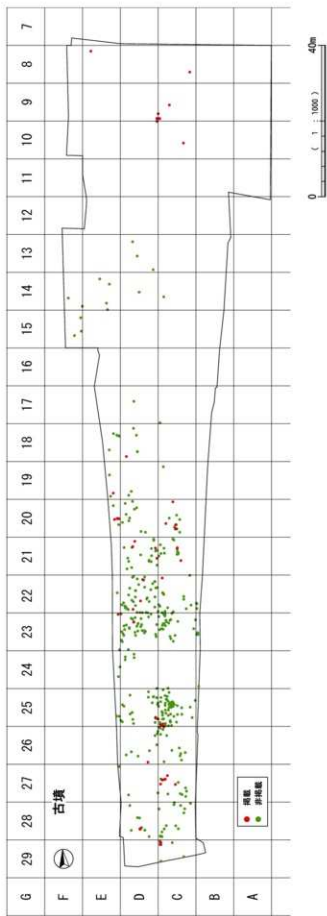
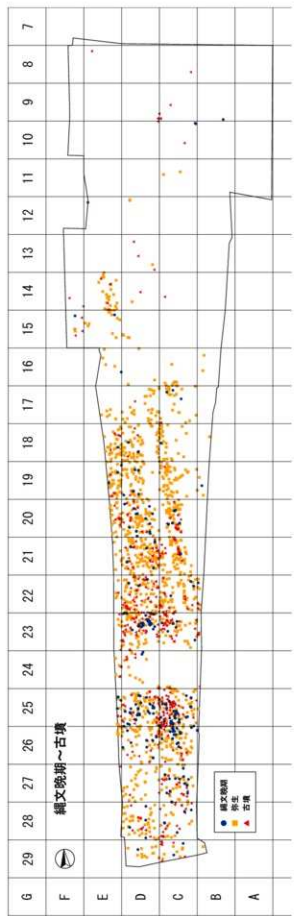
519・520は鉢の底部で、平底の径はいずれも3cm程度である。520は成形も丁寧で、外面の器面調整はミガキが行われる。

オ 埴 (第103図521)

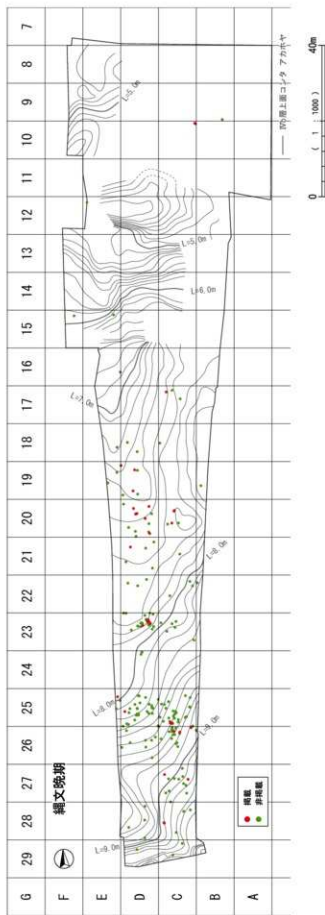
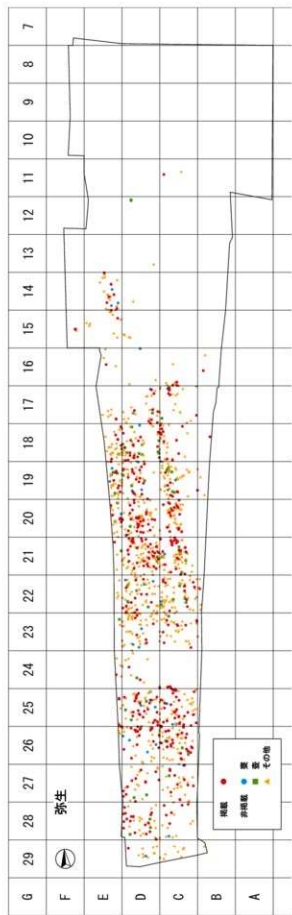
521は、埴の胴部である。頸部内面には稜をもち、外面はミガキで器面調整を行う。

カ 高坏 (第103図522・523)

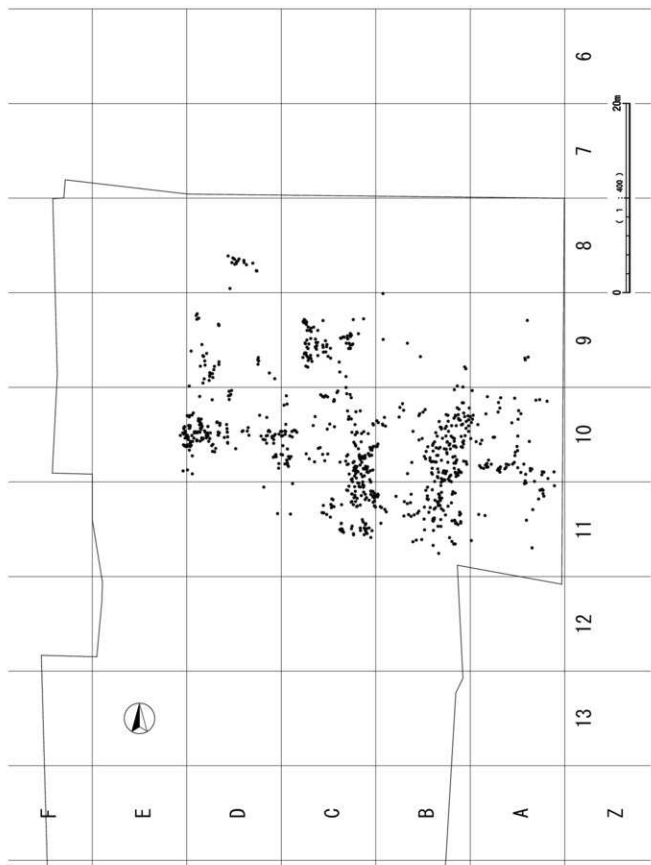
522・523は、高坏の脚部である。522は脚の端部を欠損するが、脚部の開きと同じように坏部が立ち上がる。



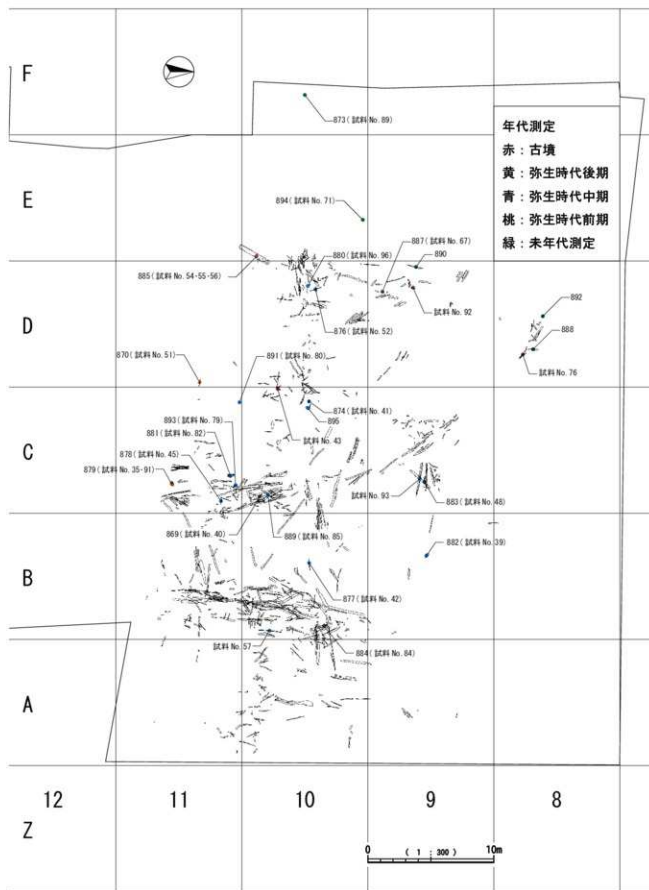
第98図 縄文時代晩期～古墳時代遺物出土状況図(1)



第99図 縄文時代晩期～古墳時代遺物出土状況図(2)



第100图 木製品等出土状況图(1)



第101図 木製品等出土状況図(2)

焼成前の穿孔が2か所残るが、本来は4か所だったと考えられる。523はやや高い脚部をもち、坏部は丸味をもって立ち上がる。

キ その他 (第103図524・525)

524は、手捏ね土器で鉢形を呈する。指頭痕が多く残る。525は小型土器で、脚部も大半が欠損する。

(2) 木製品 (第104図526～528)

古墳時代の木製品は、3点を図化し掲載した。いずれも低湿地のⅡb層からの出土である。526・527・528は、自然科学分析を行った。

526はE-9区、527はB-13区から出土した板状の木製品である。526は上・下部に両側から挟りが入り、上半は厚く加工された部分がある。田下駄や紡織具の可能性も考えられる。527は左辺上部に加工痕が残るが、他の部分は欠損する。用途等は不明である。528はC-10区から出土した鳥形をした木製品で、最大長37cmを測る。厚さが均一で丁寧に加工され、2か所に穿孔が行われている。用途等の詳細は不明である。

放射性年代測定の結果、526は4世紀、527・528は5～6世紀の数値を得た。526・528の樹種はカヤであった。

3 弥生時代の遺物

包含層出土の弥生時代の遺物には、土器・石器・木製品がある。出土層は、縄文時代晩期及び古墳時代と同じⅡ層である。

(1) 土器

土器は、甕・壺・鉢・高坏等が出土した。出土量では甕が圧倒的に多い。甕については、外反する口縁部をもつ如意形口縁のものと同湾する口縁部で刻目突帯をもつものに大別した。壺については、夜臼式土器に伴う壺と板付式土器に伴う壺を念頭に分類した。その他の器種については、出土量が少ないことから一括して扱った。また、底部についても最後に一括して掲載した。掲載していない土器付着炭化物1点(試料No.32)の科学分析を行った。

ア 壺

壺については、口縁部が外反するものをⅠ類、口縁部が外反しないものをⅡ類、Ⅰ類とⅡ類の折衷型をⅢ類、その他をⅣ類と大別した。さらに、各類の特徴から細分した。Ⅰ類は如意形口縁を有する土器で、Ⅱ類は刻目突帯を有する土器である。以下、各類の特徴を述べる。

Ⅰ類

Ⅰ類は、外反する口縁部をもつ土器群である。如意形の口縁をもつものである。さらに、それぞれの特徴から4つに細分した。刻目突帯土器、高橋式土器、入米式土器を含む。

Ⅰa類：口縁端部が僅かに外反し、口唇部に施す刻目が大きいもの。外反の度合いは緩い。

Ⅰb類：口縁部の先端が僅かに外反し、口唇部に施

す刻目がⅠa類より小さいもの。外反の度合いは緩くて緩い。口縁部を作出する際、粘土を貼り付けられないものと貼り付けるものがある。

Ⅰc類：口縁部が短く外反し、口唇部に小さな刻みを施すもの。外反の度合いは強い。口縁部を作出する際、粘土を貼り付けられないものと貼り付けるものがある。

Ⅱ類

Ⅱ類は口縁部が外反しない土器群で、刻目突帯土器と呼ばれるものである。さらに、特徴から7つに細分した。板付式土器、高橋式土器を含む。

Ⅱa類：口唇部から下がった所に大きな刻目を施す突帯をもつもの。

Ⅱb類：口唇部から下がった所に小さな刻目を施す突帯をもつもの。

Ⅱc類：口唇部に接して、大きな刻目を施す突帯をもつもの。

Ⅱd類：口唇部に接して、小さな刻目を施す突帯をもつもの。

Ⅱe類：口縁部と一体化した三角形の突帯をもつもの。

Ⅱf類：口縁部と一体化した台形状の突帯をもつもの。

Ⅱg類：Ⅱa～Ⅱf類に分類できないもの。

Ⅲ類

Ⅰ類とⅡ類の特徴をもつもの。いわゆる折衷型である。

Ⅳ類

Ⅰ～Ⅲ類に分類できなかったもの。

以下、分類ごとに記述する。

【Ⅰ類】

Ⅰa類 (第105図529)

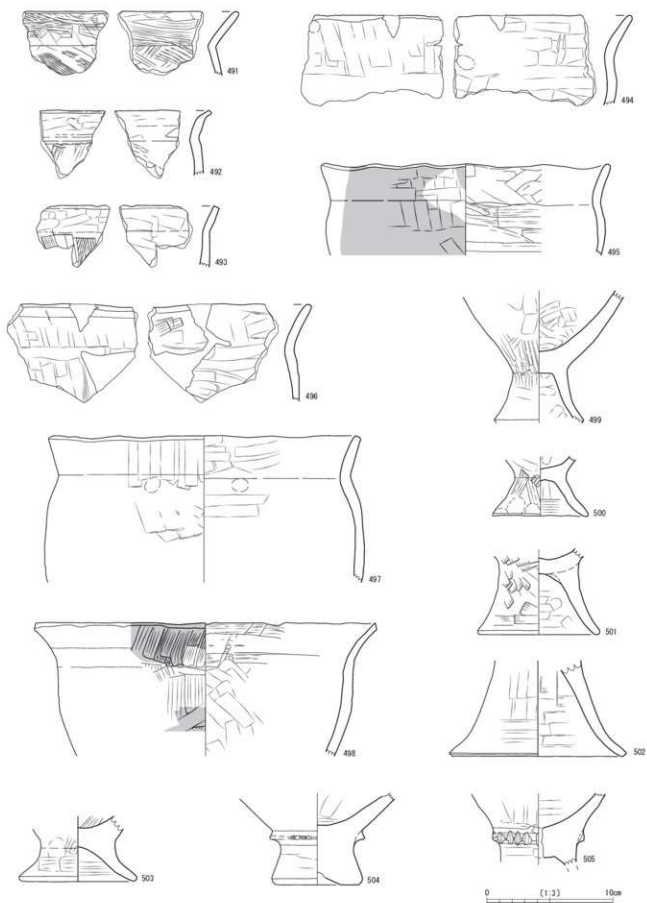
Ⅰa類は529の1点のみで、やや外反する口縁部をもつ。口縁部外端に上方向からの刺突を施し、口縁部下位に低い三角突帯を貼り付け、大きい刻目を施す。

Ⅰb類 (第105図530～537)

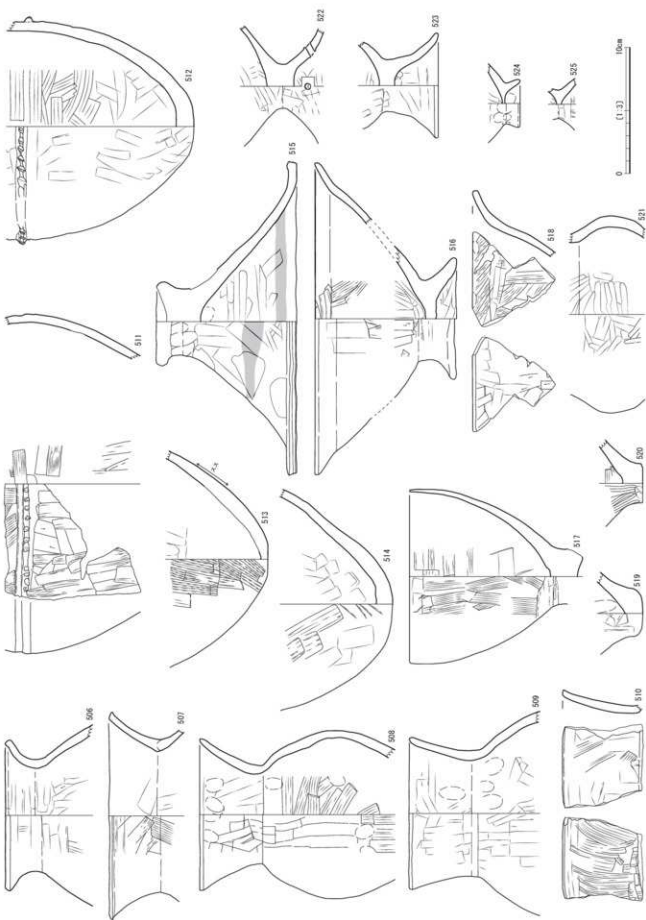
530～537は口縁部の先端をわずかに折り曲げ、口唇部に刻みを施す。中でも、532～537は口縁端部に粘土を貼り付けて、如意形口縁をつくるものである。530は、口唇部から近い所に刻目突帯を巡らす。531は口唇部を平坦に仕上げ、口縁部直下から胴部の外面には器面調整のハケメが残る。535は、2次焼成のため器面がざらつく。536は胴部に器面の盛り上がりが残ることから、突帯が巡っていたことが考えられる。530・533・534の外面にはスガが、532には赤色顔料が付着する。534は、自然科学分析を行った。

Ⅰc類 (第105・106図538～560)

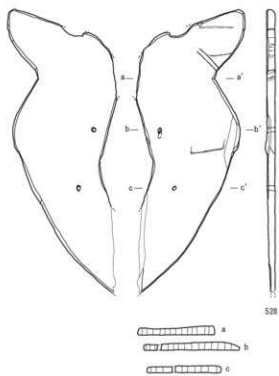
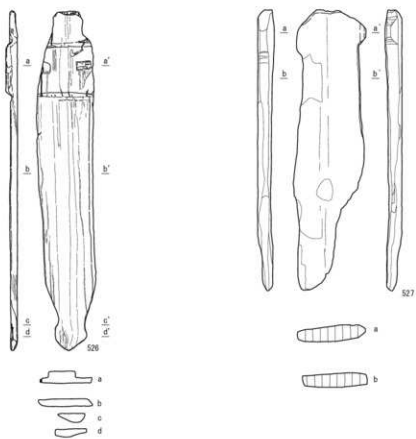
538～560は、口縁部を短く外反させる。Ⅰb類の口縁部と比べて長く外反させるが、その度合いは強い。



第102図 古墳時代の遺物（1）（土器）

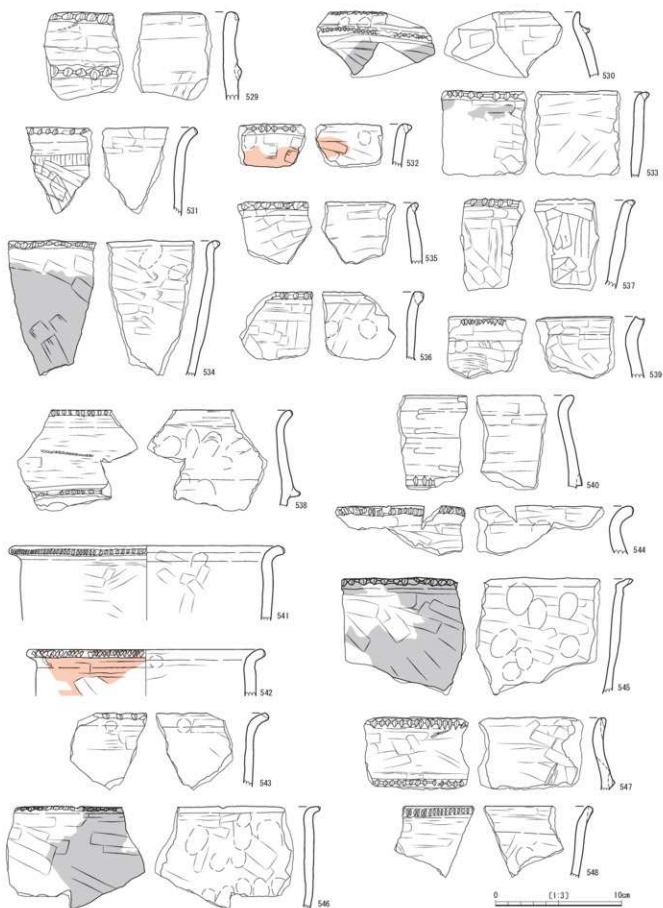


第103図 古墳時代の遺物（2）（土器）

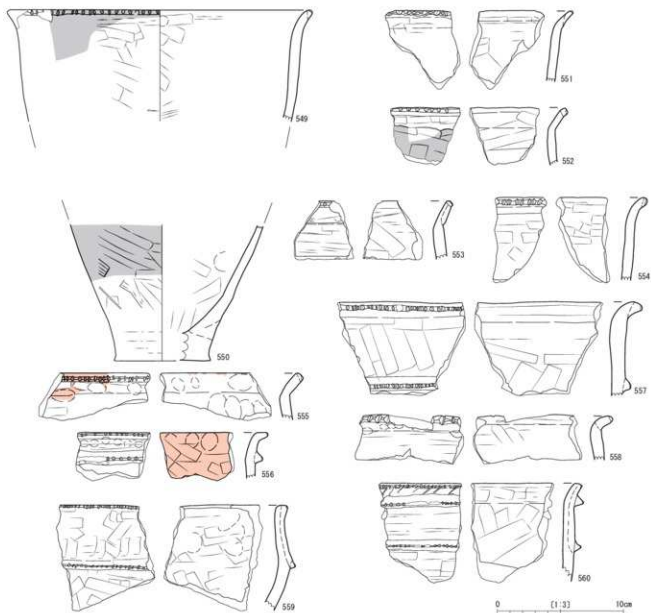


0 [1:5] 10cm

第104図 古墳時代の遺物（3）（木製品）



第105図 弥生時代の遺物（1）（要1類）



第106図 弥生時代の遺物（2）（甕I類）

538～546は、口縁端部に粘土を貼り付けずに折り曲げる。538は、口縁部と胴部の境の屈曲部に刻目突帯を巡らす。口唇部の刻みは、外側寄りに施される。539は、口縁部外面に薄く粘土を貼り付ける。さらに、口唇部を平坦に仕上げ、外端に小さな刻みを施す。540は538と同じような器形であるが、口唇部に刻みは施されない。胴部には、低い刻目突帯が巡る。541は、口唇部下端に刻みを施す。542は、外面に赤色顔料が付着する。543は押圧による口唇部の刻みを施すため、口唇部外端が波打つ。544は口唇部を丸く収め、密な刻みを施す。545の口唇部は丸く仕上げているが、強い押圧による刻みを施すことから、場所によって形状が異なる。外面にはスグが

付着する。546は、口縁部を強く折り曲げる。外面には被熱による剥離がある。外面にはスグが付着する。547～560は、口縁部もしくは口縁部に粘土を貼り付けて口縁部を作るものである。547は、口縁部外端に粘土を貼り付ける。さらに、口縁部と胴部の境に低い刻目突帯を巡らす。547・548は、口唇部下端に刻みを施す。549は口縁端部に粘土を貼り付け、口縁部を短く折り曲げる。胴部はやや膨らみながら底部へ至る。550は底部であるが、549と同一個体の可能性があることからここに示した。接地面がやや張り出し、底面には白色土が残る。549・550の外面にはスグが付着する。551は、口縁部を薄く仕上げる。552の外面にはスグが残る。553は、口

縁部外端に広く粘土を貼り付ける。555の内外面には、赤色顔料が残る。556は口縁端部を折り曲げた際、カーブする内面の上向き部分を平坦にする。口縁部にさらに刻目突帯を巡らす、その間隔は狭い。557は器壁が厚く、口唇部の刻目と口縁部と胴部の境に巡る突帯の刻目は密に細かく施す。558は、折り曲げる部分に粘土を貼り付けて作る。559・560は、口縁部の外側全面に粘土を貼り付け肥厚させる。559は、口縁部と胴部の境が屈曲する器形となる。560は口唇部に刻みを施して、さらに、口縁部の上下に2条の刻目突帯を巡らす。いずれの刻みも細かく密である。

【Ⅱ類】

Ⅱ a 類 (第107図561~566)

561~566は、口唇部からやや下がった外面に総じて帯状を呈する突帯を巡らせ、大きくて深い刻みを施すものである。561は、内傾する口縁部が胴部との境で屈曲する器形をもつ。屈曲部に突帯を巡らせる。562は、上位の突帯直下に孔が穿たれる。穿孔は、焼成後である。563の屈曲部を巡る突帯の刻みは大きい、口唇部直下の突帯の刻みは小振りである。屈曲部をもつ器形と考えられる。564の突帯は、口唇部から僅かに下がった位置に貼り付けられる。屈曲部にも突帯が貼り付けられた痕跡がある。外面の器面調整は粗い。565を巡る2条の突帯は、上下に波を打つ様に貼り付けられる。内外面には器面調整の条痕が残る。566は胴部に屈曲部をもたず、底部に向かってすぼまる器形と考えられる。

Ⅱ b 類 (第107図567~568)

567・568は口唇部から下がった所に帯状突帯を巡らせ、Ⅱ a 類土器と比べると小さな刻みを施すものである。567は内傾する口縁部をもち、口唇部は平坦に仕上げる。568は突帯上にへら状の工具で鋭い刻みを施すが、その刻みは器面上まで及ぶ。

Ⅱ c 類 (第107図569~577)

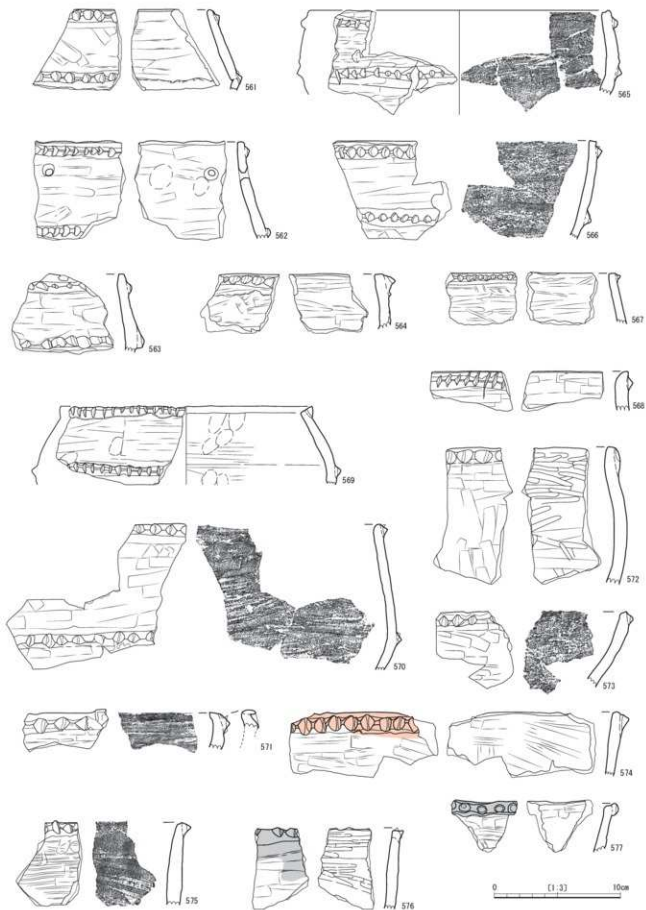
569~577は、口唇部に接して大きく深い刻みを施す突帯をもつものである。口唇部に接する突帯は、粘土を貼り付けて作る。569の口唇部に接して巡る突帯は、幅が一定しない。570は、口縁部と胴部の境で屈曲する器形をもつ。突帯の刻みは、大きく深い。571は、内湾する口縁部に突帯を貼り付ける。部分的に突帯から口唇部までさらに粘土を貼り付けて突起を作った痕跡が観察される。572は、円形の刻みが明瞭に施される。内面は丁寧なミガキによる器面調整である。573の口唇部は、面取が行われる。574は、突帯付近を中心に赤色顔料が僅かに残る。575の外面の器面調整は、条痕後に工具ナデを行う。576の内面は、ミガキによる器面調整である。577は粘土紐を貼り付けただけの突帯で、円形の刻みを施す。外面にはススが附着する。

Ⅱ d 類 (第108・109図578~610)

578~610は、口唇部に接して突帯を巡らせ、その突帯に小さな刻みを施すものである。突帯は口縁端部を積み出すものと粘土を貼り付けるものがある。また、粘土を貼り付けて帯状の突帯とするもの、貼り付けた粘土を三角形状にするものがある。578は内湾する口縁部の外端に刻みを施し、口縁部と胴部の境に刻目突帯を巡らす。口唇部は、平坦に仕上げる。579は内傾する口縁部外端に僅かな粘土を貼り付け、刻みを施す。580は、平坦に仕上げた口唇部の外端に小さな刻みを施す。581~584の口縁部は内傾もしくは内湾し、口縁部と胴部の境に屈曲部をもつ器形である。583以外の器面調整は粗い。585は、屈曲部をもたない器形と考えられる。口唇部は面取されるが、内端がややせり出す。外端には粘土を貼り付け、刻みを施す。586は、口唇部外端に粘土を貼り付ける部分と貼り付けない部分がある。突帯に深く切れ込む刻みは、突帯下の器面まで及ぶ。587は、棒状の工具を押しつけて刻みを施す。588は口唇部に接して突帯を貼り付け、口唇部を平坦に仕上げる。刻みは細かく密に施す。589の器壁は薄く、内外面に赤色顔料が残る。590の内面と591の口縁端部の内外面に赤色顔料が残る。592は、2条の刻目突帯が短い間隔で貼り付けられる。胎土に長石・石英・小礫を多く含むため、ミガキによる器面調整はあるが、緻密さに欠ける。593は直立する口縁部の外端に低い突帯を巡らせ、浅い刻みを施す。594は口唇部に接して突帯は貼り付けない、口唇部外端に小さな細い刻みを施す。595は594と同じような器形をもつが、口唇部にも口唇部下の突帯にも刻みはない。596にはススが附着し、598の内外面には赤色顔料が残る。598は突帯に施す刻みが突帯下の口縁部外面まで及ぶ。内外面には赤色顔料が残る。601は、半管状の工具で刻みを施す。603は、下位の突帯に施す刻みが胴部外面まで及ぶ。外面にはススが附着する。604は同じ突帯に施す刻みの手法が異なり、外面には器面調整の条痕が残る。605は、2回の刺突で刻みを施す。608は上位の突帯直下に沈線で山形の文様が描かれ、稜の直裏も見られる。609は、口縁部外面まで及ぶ長い刻みを施す。610の器壁は薄く、内外面はミガキによる器面調整である。

Ⅱ e 類 (第110・111図611~630)

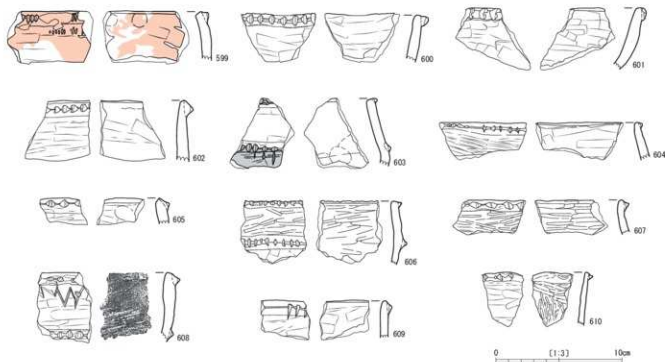
611~630は、口縁部と一体化した三角形の突帯をもつものである。口縁部は内湾するものと直立するものがある。突帯に施す刻みは、総じて小さくて細かい。その中でも611~622は、突帯が水平とならないものである。611は、口唇外端を積み出して小さな突帯を作る。外面にはススが附着する。612は、間隔を空けて刻みを施す。613は、外面に朱とスガが残る。614は、突帯下部と口縁部との接合痕を残す。616の下位の突帯は、やや上方に貼り付けられる。617の外面にはスガが附着し、



第107図 弥生時代の遺物（3）（要Ⅱ類）



第108図 弥生時代の遺物（4）（甕Ⅱ類）



第109図 弥生時代の遺物（5）（要Ⅱ類）

内面には稜痕が残る。618の突帯は、粗雑な刻みが施される。突帯の下部には接合痕が残る。619は、2条の突帯の接合痕が明瞭に残る。620は、突帯の刻みを小さく密に施す。622の突帯に施される刻みは、小さくまばらである。

623～630は、三角形の突帯を水平に貼り付けるものである。623の外表面は、明赤褐色に発色する粘土を全面に貼り付ける。624は灰白色の色調を呈し、突帯の刻みはまばらに施される。625は上位の突帯に施される刻みは縦に長いが、下位の突帯の刻みは小さく密に施される。627は、器面調整のハケメが残る。629の胴部を巡る下位の突帯の刻みは、小さく密に施される。

Ⅱ f 類（第112～114図631～657）

口縁部と一体化した台形突帯をもつものである。台形状の突帯にも上面が窪むもの、水平となるもの、垂れ下がるものがある。さらに、突帯に刻みを施すものと施さないもの、突帯の先端が凹線状となるものがある。突帯と器面との接合痕は残るものと残らないものがある。

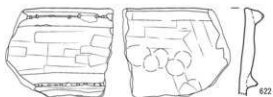
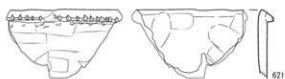
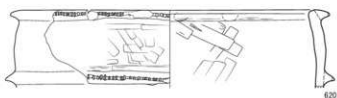
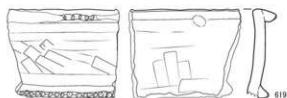
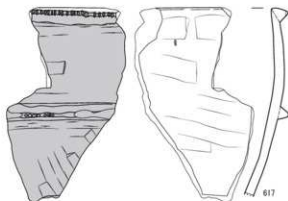
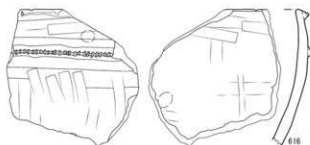
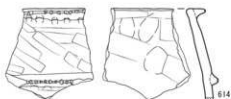
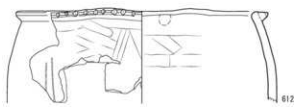
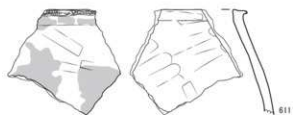
631～637は水平に貼り付けられた突帯の上面が窪み、先端に刻みを施すものである。632の突帯下部と器面の接合痕は、意識的に強調してあると考えられる。634の刻みは、ヘラ状工具を押圧する手法と浅く切る手法の両方が使われる。635は、外面の突帯下を押しえ付けて窪ませることにより接合痕を処理している。突帯上面の窪みは僅かである。突帯の刻みは、小さく密である。外面

にススが付着する。637は、外面にススが付着する。

638～644は突帯の上面が水平に貼り付けられ、先端に刻みを施すものである。口縁部は直立するものと内湾するものがある。638は、口縁部の上面観が楕円形状となる。上位の突帯の刻みはほぼ一定の間隔をもつが、下方の突帯の刻みはまばらで施されない部分もある。641の突帯は幅、厚さとも不均一で、内側へ張り出す部分もある。外面にススが付着する。642の突帯の刻みは、密に施される。643の突帯の刻みは、突帯の厚さに合わせて丁寧に施される。突帯と器面との接合痕は残らない。外面には、ススが付着する。644は幅広く厚みのある突帯を貼り付けるが、口縁部外面との接合痕が残る部分とナデを丁寧にすることで残らない部分がある。突帯の刻みは、先端より下方に施される。さらに、胴部にも高さのない突帯を3条巡らせるが、刻みはない。

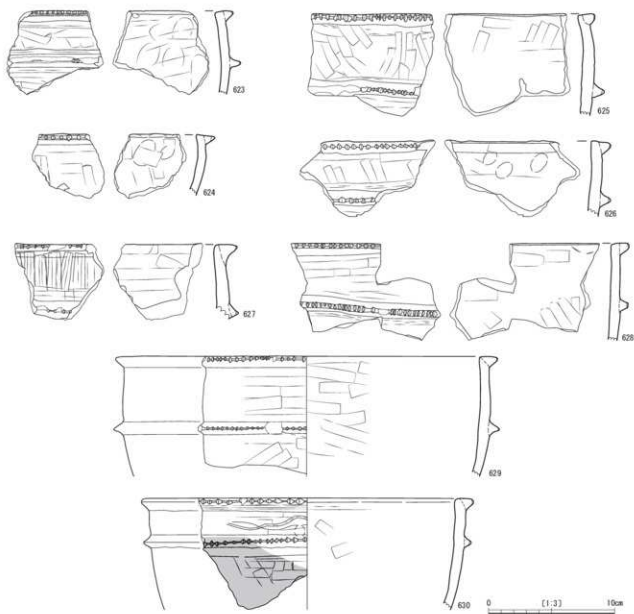
645～647は下方に垂れ下がる台形状の突帯をもち、突帯の先端に刻みを施すものである。口縁部は、内湾か直立する器形である。いずれも小さく、密な刻みを施す。645は突帯上に1条、突帯直下に2条の沈線を巡らす。さらに胴部にも無刻みの低い突帯を3条巡らす。646は胴部に1条の沈線を巡らす。648は大きく垂れ下がる突帯をもち、胴部には断面が三角形の無刻目突帯を貼り付ける。

649～657は口縁部と一体化した突帯をもち、その先端を窪ませるものである。胴部には2～3条の沈線もしく



0 (1.3) 10cm

第110図 弥生時代の遺物(6)(要Ⅱ類)



第111図 弥生時代の遺物（7）（Ⅱg類）

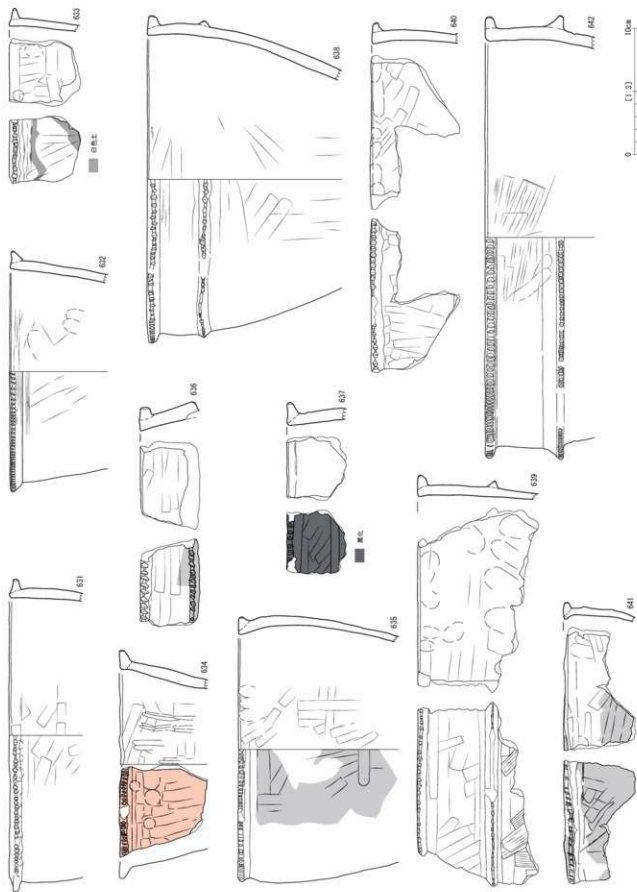
は低い突帯を巡らす。649は、突帯の先端がやや垂れ下がる。胴部に2条の無刻目突帯を貼り付け、外面にはススが付着する。650は、突帯の先端に施す窪みが総じて浅い。651の突帯は、台形より四角形に近い。胴部に明瞭な沈線が3条巡る。652は、胴部に刻みの施されない低い突帯を3条もつ。外面にはススが付着する。653は厚みのある突帯を貼り付け、胴部には沈線を3条巡らす。654は、突帯に施す窪みが先端部より下方となる。655の口唇部に貼り付けた突帯先端の窪みは、細く浅い。656は、胴部に複数の突帯が貼り付けられた痕跡がある。657は突帯が上向きに貼り付けられ、胴部に2条の沈線が巡る。外面に炭化物が付着する。

Ⅱg類（第115・116図658～676）

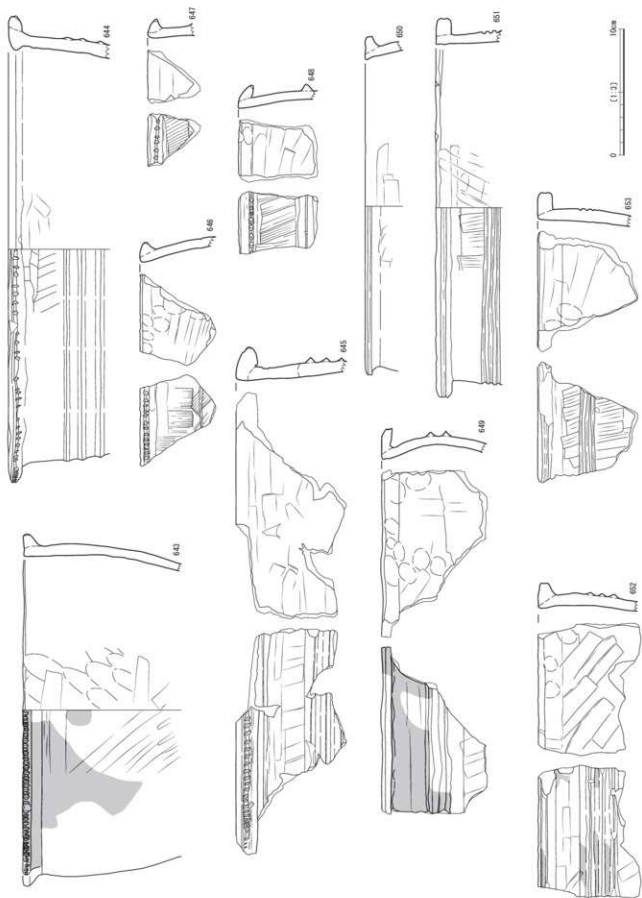
Ⅱa類からⅡf類に分類できないものをまとめた。659は自然科学分析を行った。

658～662は、口唇部から下がった所と胴部に刻目突帯を巡らすものである。658の2条の突帯の大きさは、ほぼ同じで細かな刻みを施す。口縁部先端の内外面のみが摩耗する。659の外面には炭化物が付着する。660～662は上位の突帯しか残存しないが、胴部にも突帯が巡ると考えられる。661は、口唇部を平坦に仕上げる。662は内外面に赤色顔料が残る。

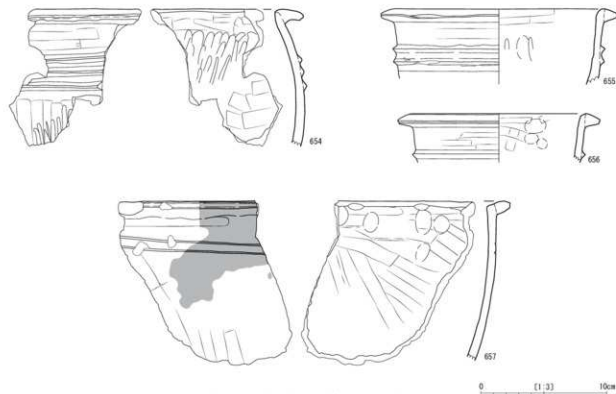
663～668は、複数の刻目突帯が接して貼り付けられるものである。663～667は口縁部に2条の刻目突帯を、668



第112図 弥生時代の遺物(8) (要II類)



第113図 弥生時代の遺物（9）（要Ⅱ類）



第114図 弥生時代の遺物 (10) (Ⅱ類)

は3条の突帯を間近に巡らせる。いずれも細かい刻みを施す。胴部を欠損するものもあるが、胴部にも突帯が巡ると考えられる。

669～675は、刻みが施されない突帯をもつものである。669の胴部には、2条の沈線が施される。670～673の胴部には突帯が巡る。671は、口縁部と胴部を巡る突帯の間をハケメで調整する。672・673は、671と同じ器形である。674は、口縁部と一体化した無刻目突帯の直下に高さのない無刻目突帯を貼り付ける。675は、突帯上にこぶ状の突起をもつ。676は胴部片で詳細は不明だが、横位に巡る複数の突帯間にも曲線状の突帯を貼り付けるものと考えられる。

【Ⅲ類】(第117図677～685)

I類とⅡ類の特徴をもつものである。如意形口縁の口唇部を摘み出したり粘土を貼り付けたりしてⅡ類の口縁部に似せるものである。この中には広く平坦に仕上げた口唇部の外端を突帯に似せるものと口唇部に突帯を貼り付けるものがある。また、突帯に刻みを施すものと施さないものがある。

677は口唇部の両端を摘み出し、刻みを施す。外面にはスガが付着する。678は、粘土を貼り付けて広く作った口唇部に刻みを施す。679は、幅広く平坦に仕上げた口唇部外端に刻みを施す。680・681は外反する口縁部の先端に粘土を貼り付け、口唇部を平坦に仕上げ、その外端に刻みを施す。682の直立する口縁部は端部が緩く外

反し、その外面に刻目突帯を貼り付ける。683は2条の突帯とも無刻目で、内外面ともミガキによる器面調整である。684は粘土を貼り付けて口唇部を厚く仕上げ、胴部には細く高さの低い突帯を巡らす。口唇部外端及び胴部の突帯に刻みはない。685は、内湾する口縁部外端に刻目突帯を貼り付ける。

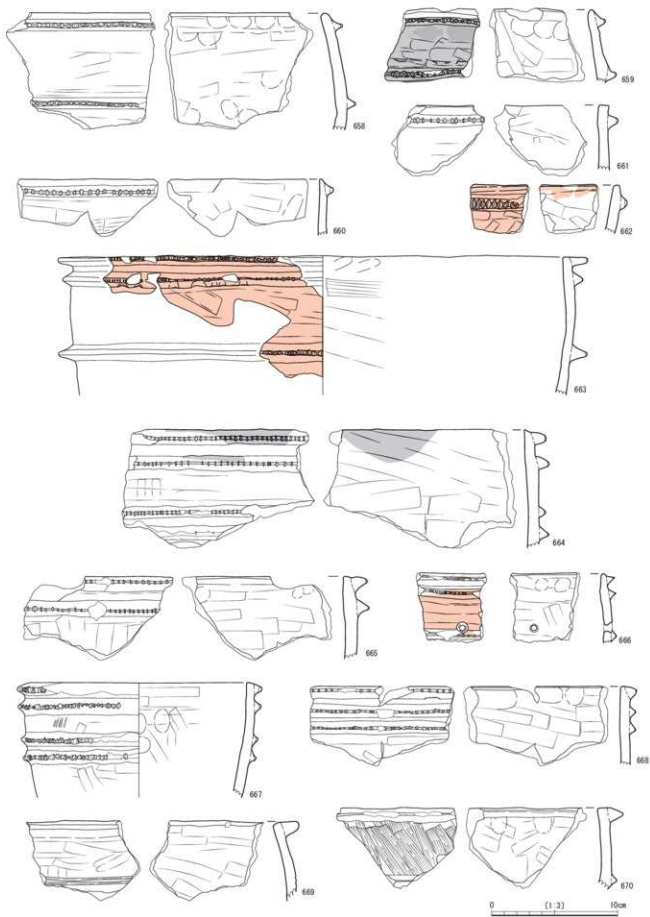
【Ⅳ類】(第118図686～699)

686～699は、Ⅰ～Ⅲ類に分類できなかったものである。686～693は口縁部の断面が厚みのある「U」字状となり、口縁部内面が小さく張り出すものである。また、口縁部が上向くものと水平となるものがある。686は、胴部に1条の沈線が巡る。687～689は、口縁部上面が浅く窪む。また、688の突帯先端にも窪みを作る。693の口縁部はやや上向きで、内外面とも器面調整のハケメが残る。黒髮式土器と考えられる一群である。

694～699は断面方形の口縁部が水平となり、内面へも小さく張り出す。口縁部の厚さは、上記686～693の土器群と比較すると薄くなる。694は、突帯先端部に浅い窪みが入る。695の外面には、ハケメが残る。697は、突帯に朱が付着する。698は、薄く厚さが一定した突帯をもつ。699は、口縁部内側への張り出しが強い。これら一群は須玖式土器と考えられる。

【底部】(第119図700～721)

700～705は、接地面が外へ張り出しをもつ一群である。700の外面には、スガが付着する。701・702の底面



第115図 弥生時代の遺物 (11) (要Ⅱ類)

には、白色土が付着する。また、702～704の底面には木炭痕が残る。

706～710は、底部の接地面から直立気味に立ち上がるものである。706・707・710は、底面に白色土が付着する。709は内外面とも丁寧な器面調整で、内面には赤色顔料が付着する。711・712は、器面調整のハケメが底部まで及ぶものである。713は平底で、緩やかに膨らみながら胴部へ至る器形をもつ。

714・715は、充実脚台である。714は、底面端部を面取る。715は、外面にハケメ痕が残る。716～721は、中空の脚台である。716・717は、やや浅い中空である。718は、中空内も丁寧なヘラナデを施す。

イ 壺

壺については無頸壺と有頸壺に大別し、有頸壺をさらに7つに分類した。以下、各類の特徴を述べる。

I 類

I 類土器は、無頸壺である。

II 類土器

II 類土器は、有頸壺である。分類にあたっては主に器形を注視しながら、色調や胎土も参考とした。

II a 類：頸部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する。頸部の付け根に沈線を巡らすものもある。

II b 類：頸部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する。口縁部を肥厚させ、段を有するものもある。また、上胴部には様々な文様を施す。

II c 類：頸部が内傾気味に立ち上がり、口縁部が外反する。口唇部が浅く窪む。

II d 類：口縁部が外反し、口縁部内面と頸部付け根付近に突帯を巡らす。口唇部は厚くなる。

II e 類：頸部から直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。

II f 類：口縁部が逆「く」の字状を呈するもの。

II g 類：壺の胴部片である。

以上の分類に従って記述する。

【I 類】(第120図722・723)

I 類とした無頸壺は、722と723の2点である。722は口縁部が内傾し、胴部との境に屈曲部をもつ。屈曲部の上下に細沈線を巡らす。器壁の厚さが一定でないという特徴もつ。ミガキによる器面調整と考えられる。器面がやや摩耗している。内外面に赤色顔料が残る。723は胴部が膨らみ、口縁部が内湾する器形をもつ。口縁部には2条の細沈線が走り、その間に穿孔がある。穿孔は焼成前で、外面から内面に向かって行われる。内外面とも丁寧なミガキであるが、外面の大部分は表面が剥落している。

【II 類】

II 類は、有頸壺をまとめた。II 類は頸部が内傾気味に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反するものである。総じてミガキによる器面調整を行い丁寧である。

II a 類 (第120図724～741)

II a 類の中でも、口縁部が短く外反するものと口縁部部が外反するものがある。また、頸部の付け根に沈線を巡らすものもある。

724～731は、口縁部が短く外反するものである。725は外面が部分的に、内面は半分程度表面が剥落する。外面は丹塗りで、内面も丹塗りの痕跡が残る。726は、頸部の付け根に沈線が平行して2条巡る。727は、口唇部直下と頸部の付け根に横位の沈線を施す。728は、頸部の付け根に沈線を3条巡らす。また、外面と口縁部内面には赤色顔料が残る。730は、口縁部の先端に粘土を貼り付ける。731の内面には、赤色顔料が残る。

732～739は、口縁部が僅かに外反するものである。732は、頸部と胴部の境で屈曲する痕跡が残る。733はほぼ全面に、内面は部分的に赤色顔料が残る。734の器面調整はやや粗い。734は、細かいミガキで器面調整を行う。735は頸部と胴部の境で屈曲し、丸味をもちながら胴部に続く器形である。外面は部分的に剥落する。736は、精製された胎土を用いる。737は、外面から内面にかけて赤色顔料が残る。外面の一部と内面のほとんどで剥落が見られる。738は、内傾気味に立ち上がる口縁部の端部に粘土を貼り付ける。他のものと口縁部部の製作手法に違いはあるが、器形・胎土等からここに分類した。739は、口縁部内面の下半の成形は粗い。

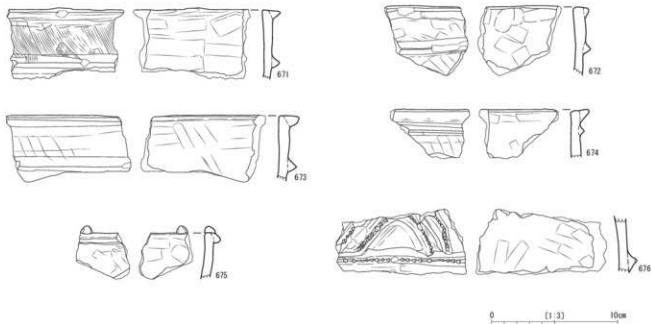
740は、頸部の付け根に浅い沈線を施す。741は、頸部の付け根に浅い段らしきものを作る。外面には、赤色顔料が全面にわたって残る。

II b 類 (第121図742～769)

II b 類は頸部が内傾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部を肥厚させ、段をもつものもある。また、上胴部に沈線等で文様を施すものである。

742～747は、口縁部片である。742は頸部から内傾気味に立ち上がり、口縁部は強く外反する。内面には稜痕が残るが、土器の焼成時に周辺が剥落する。743～747は口縁部を肥厚させ、段をもつものである。743は、口唇部の両端に刻みを施す。744は、内外面に赤色顔料が残る。746は、段直下に浅い沈線を巡らす。747は、口唇部の両端に刻みを施す。内外面にススが付着する。

748～769は、上胴部付近の文様を施す土器片である。748・749は、上胴部に沈線を施すものである。748は小型の壺で、上胴部に3条の平行沈線を巡らす。749は頸部の付け根に明瞭な沈線を、上胴部に浅い沈線を巡らす。胎土には微細な金雲母を多く含む。750～767は上胴部の上下に沈線を巡らせ、その間に沈線や貝殻刺突で文



第116図 弥生時代の遺物 (12) (Ⅱ類)

様を施すものである。750～757は、上下の沈線間に山形のモチーフを描くものである。751～753は、頸部と胴部の境に明瞭な段をもつ。753は、上下の沈線間に斜位の貝殻刺突を施す。756は、内外面に赤色顔料が残る。757は外面に赤色顔料が残るが、内面は剥落が激しい。758～761は、上下の沈線間を連続した斜位の沈線や貝殻刺突で羽状文風に施文する。758・765は沈線のみで、759・760は横位の沈線と斜位の貝殻刺突で文様を構成する。762～765は、上下の沈線間に重弧文を描く。762・765の重弧文は、貝殻での施文である。765の外面には、赤色顔料が残る。766・767は、上下の沈線間に幾何学的な文様を描くものである。767は平行する沈線間に縦位の沈線を入れ、突帯状に仕上げる。768は、767の幾何学的文様が施されないものである。769は無文で、頸部と胴部の境に明瞭な段をもつ。

Ⅱ c 類 (第122図770～779)

770～779は頸部が内傾気味に立ち上がり、口縁部が外反し、口唇部が浅く窪むものである。770は口唇部に沈線を描き、明瞭に窪みを作る。また、屈曲部付近に2条の沈線を描く。口唇部から外面にかけて赤色顔料が残る。内面には痕痕も残る。773は頸部の付け根に沈線を描き、内外面に赤色顔料が残る。774は、口縁部に粘土を貼り付け厚みを作る。口縁部に段を作るⅡ b 類の可能性も考えられる。口唇部外端には細かい刻みを施す。776は、口唇部の両端に細かい刻みを施し、その間は明瞭に窪ませる。さらに、口縁部内端には口唇部に沿って小さな刺突を連続して施す。777の口縁部内端には、2段の竹管文を口唇部に沿って施す。778は口唇部

外端に粘土を貼り付け厚みを作り、口唇部の両端に刻みを施す。内外面に赤色顔料が残る。

Ⅱ d 類 (第122図780～788)

Ⅱ d 類は口縁部が外反し、口縁部内面と頸部付け根付近に突帯を巡らす。口唇部に粘土を貼り付けて厚くするものもある。

780～785は、口縁部片である。780は口唇部が浅く窪み、内面に2条の突帯をもつ。781は器壁3～5mmと薄く、内面に突帯をもつ。口唇部と突帯には刻みが施される。782は口唇部に窪みはなく、内面に突帯を巡らす。783は口唇部の両端に細かい刻みを施し、その間を窪ませる。内面には突帯を巡らせる。784は口唇部の両端に刻みを施し、その間を浅く窪ませる。内面には、高さの低い突帯を貼り付ける。785は口縁部の先端に粘土を貼り付け、口唇部は極浅く窪ませる。外面には突帯を巡らせ、細かい刻みを施す。

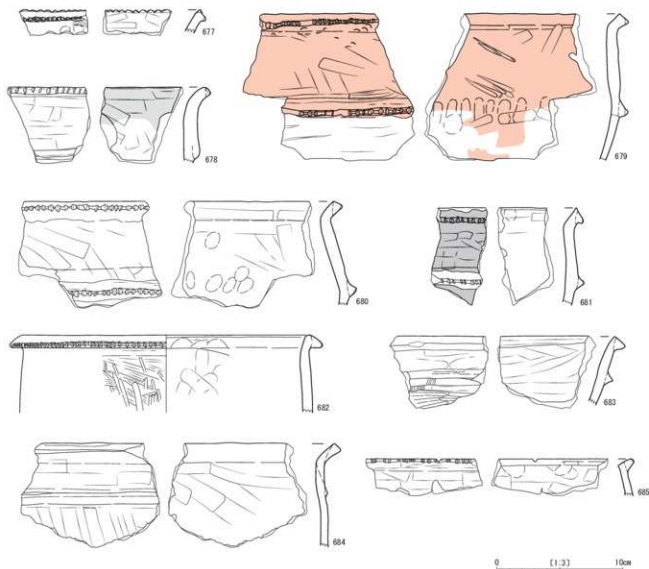
786～788は、頸部の付け根付近の破片である。786は、頸部の付け根に刻み突帯を巡らす。787は2条の突帯を巡らせ、上位の突帯に沿って2段の細かい刺突を施す。788は、突帯と4条の沈線を描くものである。

Ⅱ e 類 (第123図789～793)

789～793は頸部から直立気味に立ち上がり、口縁部が外反するものである。789は、外面と内面の一部に赤色顔料が残る。丁寧なナデで器面調整が行われる。789～791の口唇部は丸く取めるが、792は口唇部が窪む。

Ⅱ f 類 (第123図794・795)

794・795は、口縁部が逆「く」の字状を呈する二重口縁部の口縁部である。794は内外面の大部分に赤色顔料



第117図 弥生時代の遺物 (13) (Ⅲ類)

が残る。795はミガキによる丁寧な器面調整で、外面に赤色顔料が残る。

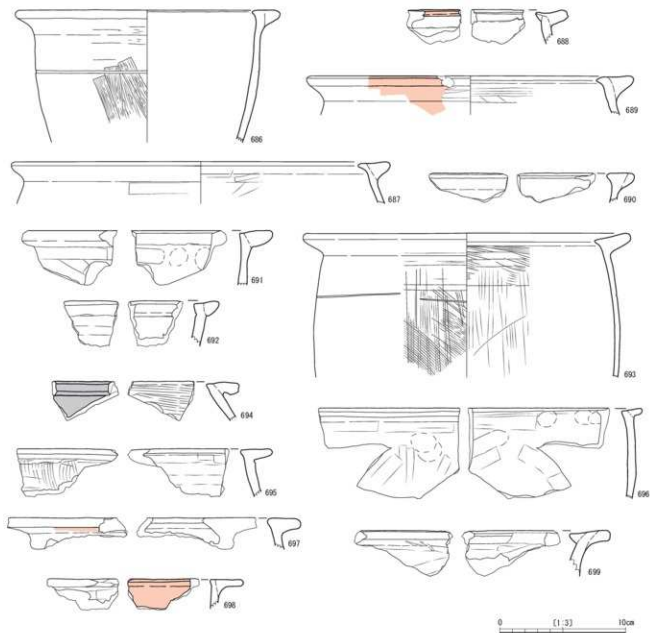
Ⅱ g 類 (第123図796~798)

796~798は、壺の胴部片である。796は球状に膨らむ胴部に3条の沈線を巡らせ、外面はミガキが施される。797は、「M」字状の突帯が上胴部と中央部に巡る。突帯は、貼り付けた後に中央を窪ませ「M」字状とする。798は胴部が屈曲し、重弧文が施される。免田式である。【底部】(第124図799~815)

799~802は、薄い円盤状の平底である。799は、全面丹塗りである。内外面とも器面が摩耗して判然としないが器面調整はミガキが行われる。800は底面に凹凸があり、不安定な平底である。内外面ともミガキによる器面調整である。801は、底面の器壁がやや厚い。802は外面には丹が塗られるが、内面の器面が剥落する。

803~809は、底部の接地面から直立して立ち上がる器形をもつものである。803は中空で、804はやや中空気味である。804は、胴部と底部の屈曲部と底面端部に沈線を巡らす。805は、底面に焼成後の穿孔が行われる。穿孔は上下方向から行われ、孔径は1.2cmほどである。穿孔から放射状に亀裂が入り割れていることから、作業中に破損したことも考えられる。底面には白色土が付着する。806は、底外面まで丁寧なミガキによる器面調整である。807はやや上げ底気味の平底で、外面にスガが付着する。808は底部接地面近くに2条の沈線を巡らせ、その上方に2本の沈線で山形の施文を行う。809は底面の器壁が厚く、やや中空となる。

810~814は底部の接地面が張り出すもので、端部を掴まみ出して作る。810は、薄手の土器である。811のやや中空の底面は、幅の狭いミガキで器面調整を行う。812



第118図 弥生時代の遺物 (14) (要IV類)

はやや中空の底面までミガキが入り、白色土が付着する。813の底面はやや中空となり、814は底面中央部がやや窪む。815の器壁は厚く、外面には器面調整のハケメ、ナデ、ミガキの痕跡を残す。

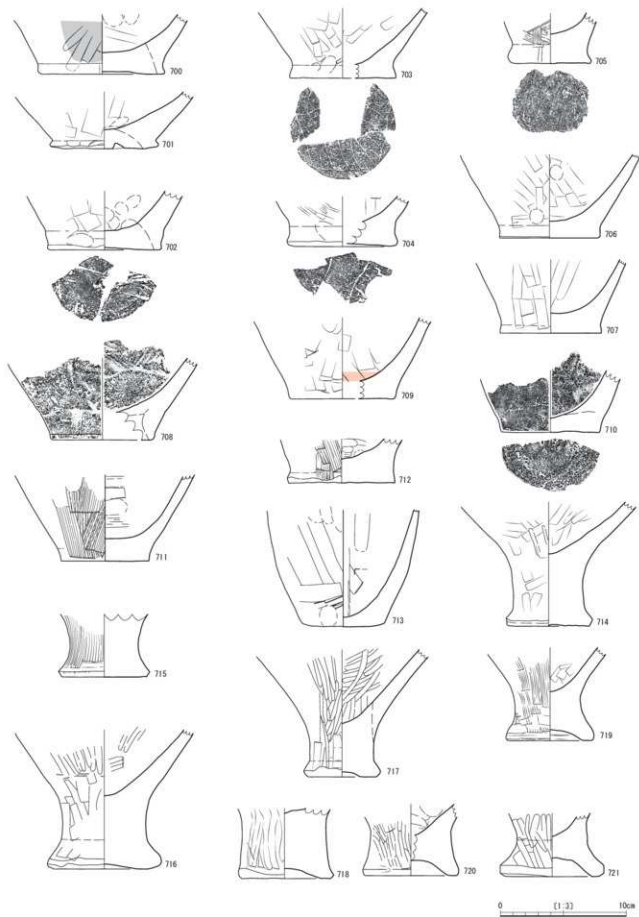
ウ 鉢 (第125図816~840)

816~822は、胴部が緩やかに膨らみ、口縁部が内湾するものである。口縁部に突帯をもつもの、もたないものがあるが、いずれも刻みを施す。816は口唇部を幅広く平坦に仕上げ外端に刻みを施し、口縁部の下方にも刻目突帯を貼り付ける。817は、口唇部外端に刻みを施す。口唇部直下の屈曲部分にはヘラ状工具による押圧痕が連続して残る。818・819は口縁部外端に突帯を上向きに貼

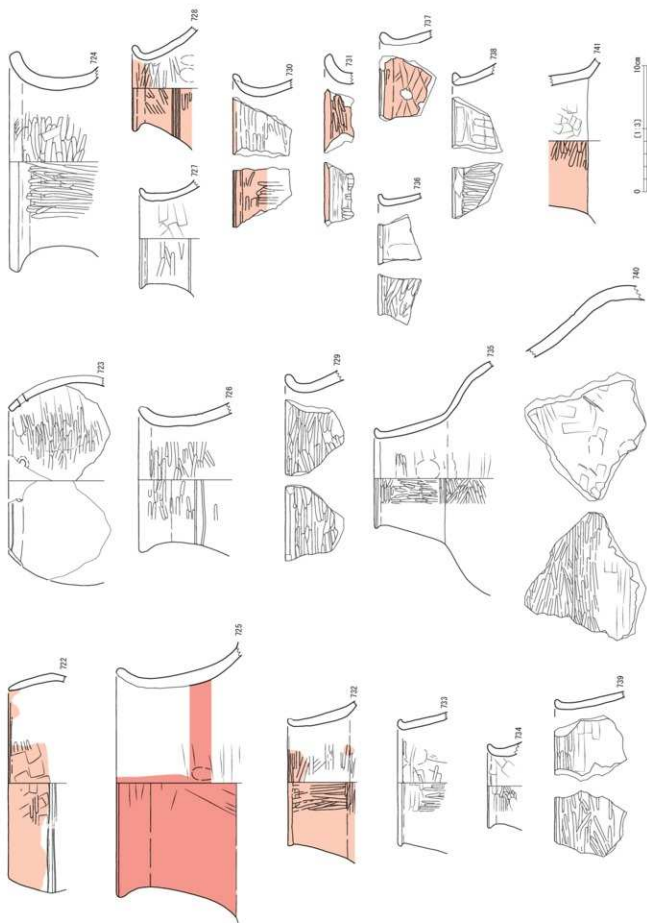
り付け、刻みを施す。819には、ススが付着する。

820は、細かい刻みを施す突帯を口唇部に接して水平に貼り付ける。821・822は、突帯の先端部が欠損するため刻みの有無は確認できない。821は、内外面に赤色顔料が残る。

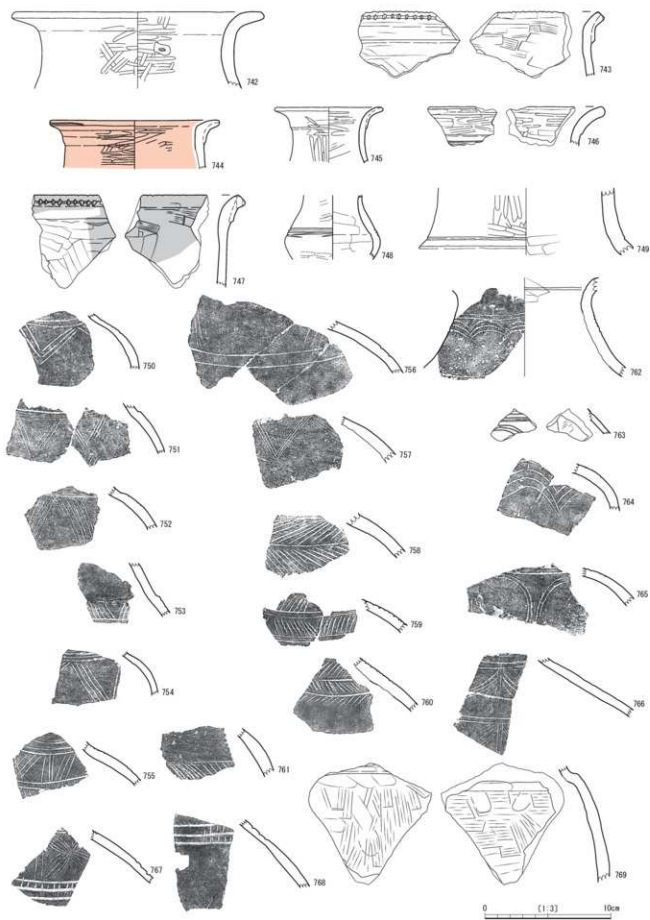
823~832は胴部が膨らみながら立ち上がり、口縁部が外開きになる器形をもつものである。いわゆる碗形を呈する鉢である。突帯をもつものともたないものがある。823~825は、突帯をもたないものである。823は、内外面から穿孔を行った補修孔をもつ。外面の器面は剥落が著しいが、内面はミガキで丁寧に仕上げる。824の胴部は膨らみが弱く、口縁部でやや外に開く。外面の剥落



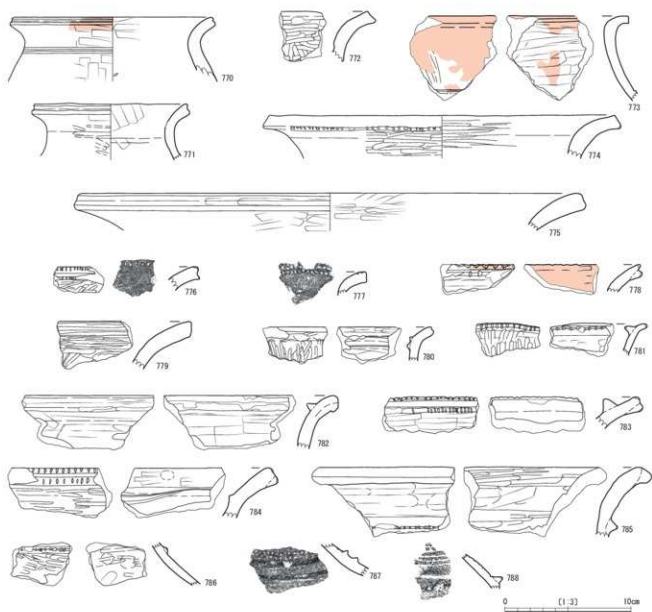
第119図 弥生時代の遺物 (15) (壺底部)



第120図 弥生時代の遺物(16) (壺I・II類)



第121図 弥生時代の遺物 (17) (壺Ⅱ類)



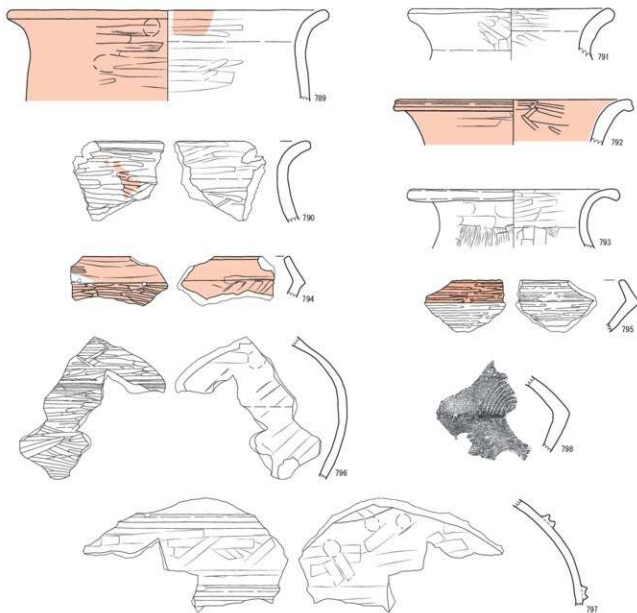
第122図 弥生時代の遺物 (18) (壺Ⅱ類)

が目立つが、内面の器面調整はミガキが施される。825は、内外面ともミガキで仕上げられる。826～830は、口唇部に接して突帯を貼り付けるものである。826は口唇部に接して突帯を貼り付け、その先端は丸く取める。外面にはススが付着する。827は口縁部に粘土を貼り付け厚くし、段を作る。828は、口唇部外端と口縁部下位に突帯を巡らす。内外面とも器面調整のミガキを施す。829は口唇部に接して突帯を貼り付け、深さはあるが複雑な刻みを施す。830は、外面に突帯の接合痕を残す。突帯と一体化した口唇部は、内側にもやや張り出す。831・832は、同じような器形・胎土をもつことから同一個体の可能性もある。内外面ともミガキを施し、丁寧に仕上げる。突帯の先端部が摩滅していることから、刻み

の有無は不明である。

833～838は、胴部から口縁部へ直線的な器形をもつものである。833・834は、口唇部からやや離して突帯を貼り付ける。835は口唇部に接して、その直下にも断面三角形の突帯を貼り付ける。836は、突帯の接合痕を残す。837は、口縁部がかなり開く器形をもつ。粘土を貼り付けて口唇部を作り、これに接して突帯を貼り付ける。さらに、口唇部から少し間を空け、もう1条の突帯を巡らす。838の口唇部は、やや幅広く作る。

839は、直立する口縁部に口唇部を平坦に仕上げる。口縁下部に突帯を貼り付けるが、ここで内側へ屈曲する器形と考えられる。840は、口縁端部を折り曲げる。内外面に赤色顔料が残る。



第123図 弥生時代の遺物（19）（壺Ⅱ類）

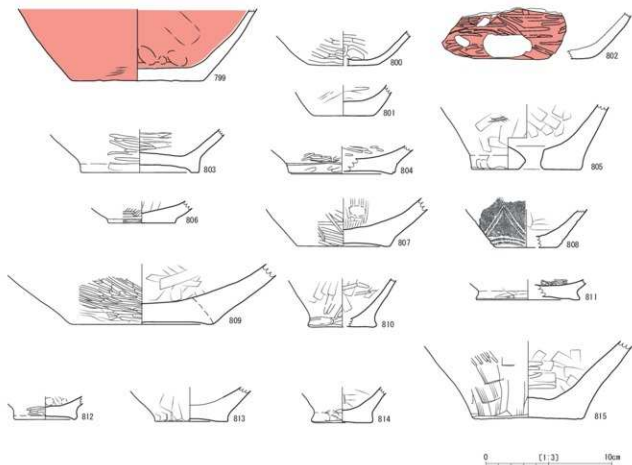
エ 浅鉢（第126図841～848）

841～848は、浅鉢である。中でも、841～845は、口縁部と胴部の境の屈曲部が確認できるものである。841は薄手で、口縁端部を折り曲げる。口縁部と胴部の境で大きく屈曲し、屈曲部の直上に沈線を巡らす。口縁端部の内外面と屈曲部の外面に赤色顔料が残る。842の下端には沈線が施される。843は大きく外反する口縁部をもち、胴部との境が屈曲する。内外面ともミガキがかかる。844の屈曲部は緩やかである。846・847は、接地面が張り出す平底である。846は底面が湾曲しているが、円盤状の底部を貼り付ける。848は上げ底で、脚が「ハ」の字状に開く。成形のための指頭痕が多く残る。

オ 高坏（第126図849～860）

849～860は、高坏である。849～852は外に開く口縁部で、断面が方形もしくは「U」字状となり、内側へやや張り出す器形をもつ。849は、口縁部先端の内面よりにスガが付着する。850・851は、内外面ともミガキによる器面調整である。852は口縁部を折り曲げ、内面屈曲部の直下に工具を強く押し当てることにより屈曲部が内側に張り出す。853は、幅広く仕上げた口唇部の両端に細かい刻みを施す。鉢の可能性も考えられる。

854～860は、脚台である。この中でも854～860は、胴部との境の屈曲部に突帯を巡らす。859・860は、充実脚台である。



第124図 弥生時代の遺物(20) (壺底部)

カ 蓋 (第126図861・862)

861は、口唇端部に三角突帯を貼り付ける。口唇部は平坦で、外面はミガキによる丁寧な器面調整である。862は鉢の可能性も考えられるが、蓋に分類した。全面に赤色顔料が残る。

(2) 土製品 (第127図863～868)

863は土製勾玉で、縦方向の孔が穿たれる。焼成前の穿孔である。縦2.6cm、横2.4cm、孔径2mmを測る。864は、紡錘車である。直径4.9cmのほぼ円形で、中央には孔が穿たれる。穿孔は焼成前であるが、裏面の穿孔周辺は器面が剥落する。865は、紡錘車の破片である。

866～868は、円盤形土製品である。866の外面には朱が残る。867には高さの低い刻目突帯あり、868は沈線で施された羽状の文様が残る。壺Ⅱ類の土器を加工したものと考えられる。

(3) 木製品

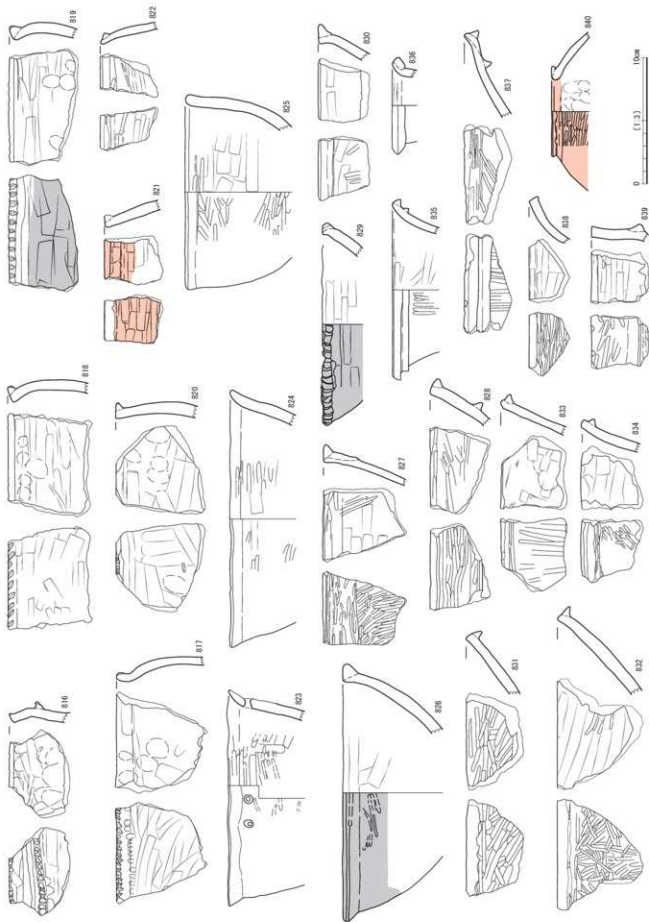
木製品は、鎌・鋤・柄・梯子等が出土した。ここに掲載した木製品は、888・890・892を除いて自然科学分析を行っている。いずれの木製品も放射性炭素年代測定値は、弥生時代に相当するものであった。

ア 鎌 (第128図869～872)

869は身のほぼ半分及び刃部の先端が欠損するが、直柄三又鎌と考えられる。身上部には柄孔があり、刃部に向かって薄く仕上げられる。刃部の先端は、欠損する。870・871は、フォーク状に分かれた又鎌の刃部と考えられる。870は刃部の先端まで残存し、上部側面に浅い抉りを作る。871の刃部の先端は、欠損している。872は又鎌の刃部の付け根付近と考えられる。放射性炭素年代測定では869は紀元前5～4世紀、870・871は紀元前1～3世紀、872は紀元前1～1世紀の結果であった。

イ 鎌 (第128図873～875)

873～875は、組合せ鋤身である。いずれも着柄部は残存しないが、刃部の先端は鋭く加工されている。874は最大幅14.3cm、最大厚2.2cmを測り、残存長は36.5cmである。身中央付近に一对の孔が残る。両側面は残存するが、先端部は欠損している。裏面の孔の上部には、孔に接して圧痕が観察できる。刃部の先端は摩耗している。また、全体的に横方向への湾曲が見られる。873・875にも孔が残るが、本来は一对であったと考えられる。875はおそらく板目材を使い、刃部を尖らせる。873・874は、イス



新125図 弥生時代の遺物 (21) (鉢)



第126図 弥生時代の遺物 (22) (浅鉢・高杯・蓋)

ノキを原材としている。放射性炭素年代測定では、873は紀元前5～4世紀、874・875は紀元前4～3世紀の結果であった。

ウ 柄 (第129・130図876～881)

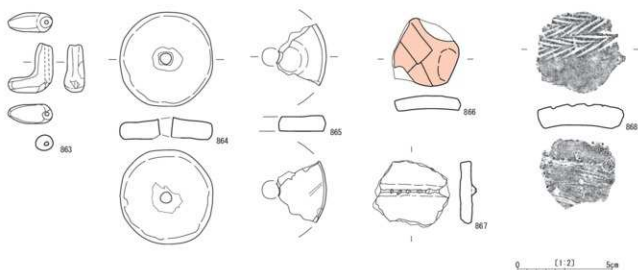
876～878は、組合せ鋤の柄と考えられる。876は径が約3cmの心持材で、長さ92cmを測る。柄の頭部は丸く仕上げられる。先端から約31cmの所に幅1cm程度の浅い圧痕が残る。また、先端から19cm程は1cm程度の段を作る。さらに反対側からも切り込みを入れて平坦面を作り、先端部の断面がほぼ方形になるように加工している。この平坦面の一部は欠損する。877は径が4cmほどの心持材を使い、端部を約15cmほど斜めに切り込んで平坦面を作る。

さらに、先端部は半球状に仕上げるが、その付け根には浅い圧痕が観察できる。878は876と同様に片面に段をもち、反対側から切れ込みを入れるが、先端は欠損する。

879～881は、柄と考えられるものである。879は曲柄鋤の一部で、装着面は明確ではないが、鋤付付近の屈曲部分と考えられる。880・881は、径5cmほどの心持材の枝分かれ部分を利用した柄と考えられる。ただ、杭や建築部材の可能性もある。放射性炭素年代測定の結果、876・878は紀元前4～3世紀、877・881は紀元前4～2世紀、879は紀元前1～3世紀の数値が得られた。

エ 梯子 (第131図882～884)

882～884は、削り込んで足掛けを作る簡易な一木梯子



第127図 弥生時代の遺物(23) (土製品)

である。882・883は、9cmに満たない心持材を削り込んで足掛けを作る。882は上段の足掛けと、その下の足掛けを作るための削り込みが残る。また、上部には、足掛けを作るための削り込みと反対方向の削り込み面がある。梯子の先端部分と考えられる。883は882と同じような心持材を使い、足掛けが1か所残る。全面がほぼ一定の厚さで欠損しており、本来はもう少し太かったと考えられる。884はクリ材を4分割した割材を使い、足掛けが1か所残る。放射性炭素年代測定の結果、882・883は紀元前4～3世紀、884は紀元前8～6世紀であった。また、882・883は樹種はいずれもマキ属で、出土地点も近いことから同一個体の可能性もある。

オ 舷側板(第132・133図885)

885は最大長272.5cm、最大幅30.5cm、最大厚4.7cmを測る舷側板である。出土地点周辺は木製品の集中部で土器や石器等の出土はほぼなかった。舷側板の表面にはチョウナ等の痕跡が良好に残るが、裏面には見られない。径が3～5cmの穿孔が15か所、切り込みが6か所確認できる。樹種はカヤで、放射性炭素年代測定では紀元前5～4世紀の弥生時代前期後半から中期初頭を示す結果であった。

カ その他(第134図886～895)

886～895は用途は不明であるが、何らかの加工が施されるものである。886は、全面にわたって丁寧な加工が施される。樹種はイスノキである。木炭の可能性も考えられる。887は、左辺の中央付近に段を作る。段の幅で圧痕が右辺へ延びる。888は、中央部に穿孔のある建築部材である。889はミカン割した部材で、樹皮が残る。先端部は欠損するが、細く加工する。樹種は、ツブラジイである。890は、建築部材と考えられる。891は曲物の

一部と考えられる。892は、割材を丸く加工する。893は、割材の先端を加工する。894は、上部の湾曲部分に加工痕が残る。また、裏面には縦方向の溝が掘られていることから、鑿身の可能性もある。895は、下辺に加工痕が残る。放射性炭素年代測定の結果、887は紀元前6～5世紀、889・895は紀元前4～3世紀、891・893・894は紀元前4～2世紀であった。

(4) 石器

Ⅱ層出土の石器のうち、器種・形状・石材等から当該時代の石器と判断したものは、22点である。のうち13点を図化した。

ア 管玉(第135図896)

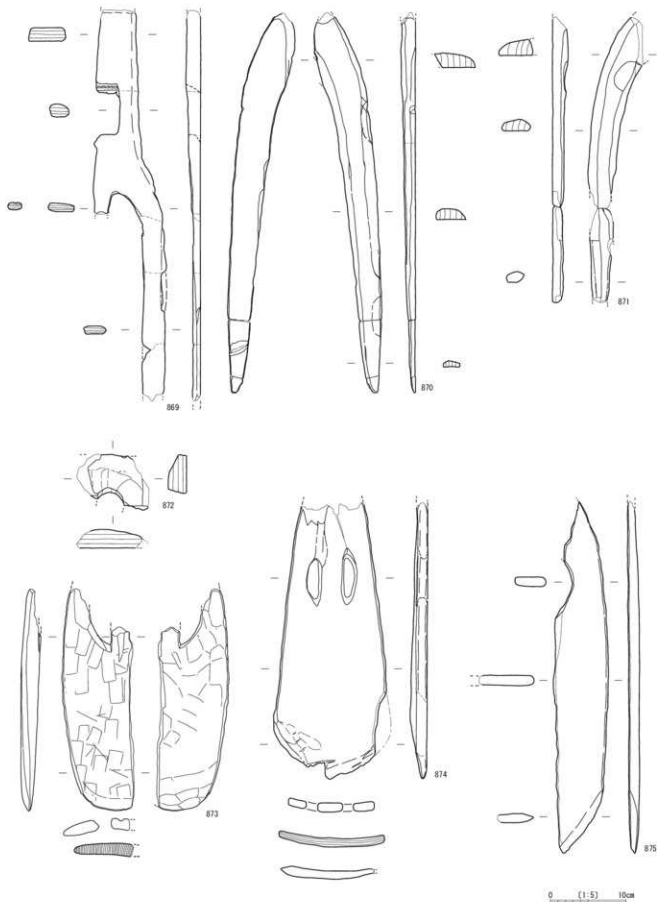
896は碧玉製の管玉で、残存長約1cmの欠損品である。外径5mm、孔径2mmを測る。

イ 磨製石鏃(第135図897・898)

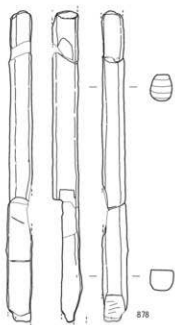
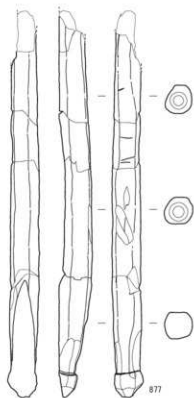
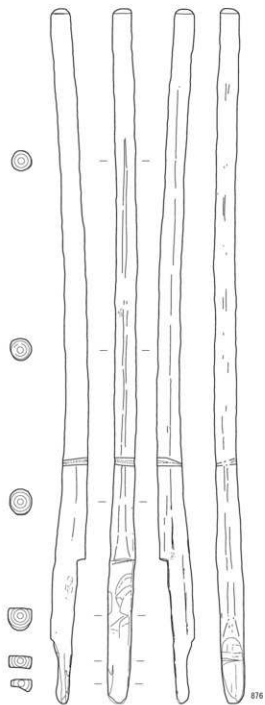
Ⅱ層から出土した磨製石鏃は2点で、全て図化した。897は砂岩製で、先端部の再加工ともみえるが、厚い。正背面とも主要剥離面や基部の研磨が粗雑である。898はホルンフェルス製で、大きさの割に重量がある。先端は欠損し、側縁には刃置れ状の微細剥離がある。

ウ 石包丁(第135図899～901)

Ⅲ層から出土した石包丁は16点で、比較的残りのよい3点のみを図化した。899は頁岩製で、刃部が強く外湾している。刃先には鋸歯状の微細加工があり、研磨は刃部のみに施している。900は頁岩製で、上部及び左半を欠くが、本来は半月形と考えられる。表面は風化が顕著だが、丁寧な加工が施されたものと考えられる。901はホルンフェルス製で、中央部しか残っていないが、垂半月形と考えられる。両面からの擦切による穿孔が2つある。

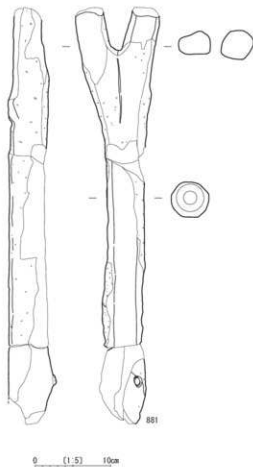
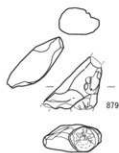


第128図 弥生時代の遺物 (24) (鍔・鏃)



0 (1.5) 10cm

第129図 弥生時代の遺物 (25) (柄)



エ 棒状石器 (第135図902~904)

Ⅱ・Ⅲ層から出土した棒状石器は3点で、全て図化した。902は、細長い砂岩の自然稜の一端に回転穿孔痕が明瞭に残る。石包丁の穿孔に用いたと考えられる。903は安山岩製で、研磨により円柱状に整形されている。904は安山岩製で、棒状敲石である。方柱状の素材の各面を研磨仕上げし、端部を作業部としている。作業部は、角部を中心に集中している。

オ 柱状片刃石斧 (第135図905~908)

Ⅱ・Ⅲ層から出土した柱状片刃石斧は4点で、全て図化した。905の石材は、頁岩と考えられる。基部を一部欠くが、ほぼ完形である。全面に丁寧な研磨を施し、刃部は片葉研状に成形される。接痕が全面に見られるが、刃部には見られない。基部端部に黒色に変色が見られ、墨の可能性もある。906はホルンフェルス製で、両側面は剥落が顕著だが、右側面は残っている。刃部研磨の状況から磨斧の再加工品と考えられる。907はホルンフェルス製で、剥落のため加工調整の詳細は不明である。幅広だった可能性があり、刃先は潰れている。908はホルンフェルス製で、研磨で成形されるが刃先は潰れている。

4 縄文時代晩期の遺物

縄文時代晩期に属する遺物を包含するのは基本的にⅡ層であるが、一部Ⅲ層上面での取り上げもあった。出土した遺物は、土器のみである。

(1) 土器

深鉢、浅鉢、高坏が出土した。以下、器種毎に記述するが、底部は一括して掲載した。

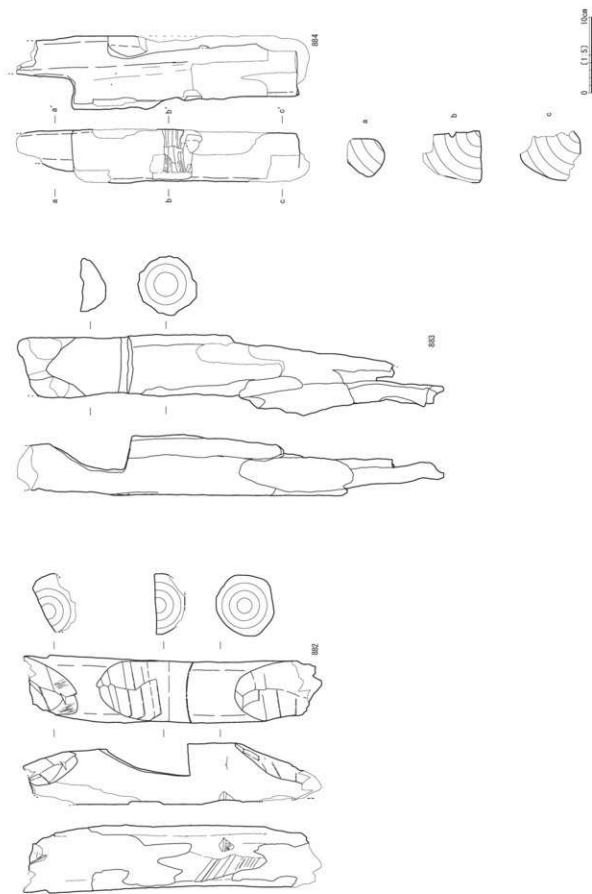
ア 深鉢 (第136図909~926)

909~912は口縁部が外反し、胴部が膨らむものである。909は長い口縁部が外反し、くびれた頸部から胴部へは膨らみをもちながら底部へ向かう器形である。成形・器面調整は粗い。910は頸部内面に明瞭な稜をもち、ミガキによる器面調整を行う。911は口縁端部を厚くし、口唇部は平坦に仕上げる。912は911と同じような器形で、内面にヘラで段を施す。911・912ともに波状口縁を呈する。

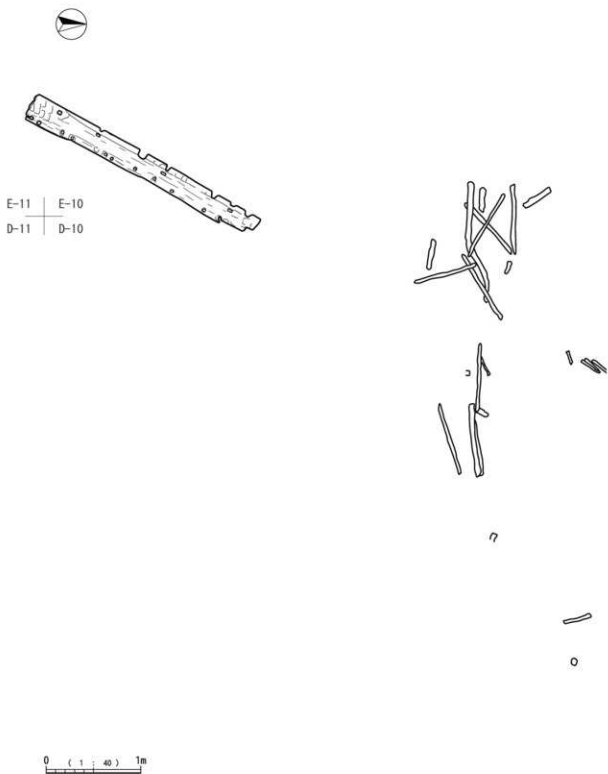
913~918は口縁部が外反し、胴部がやや膨らむものである。上記の909~912より胴部の膨らみが弱い。913は頸部のくびれ、胴部の膨らみが弱い。器壁が薄く、内外面ともミガキを施す。914は器壁が厚く、成形は粗い。915は頸部のくびれは弱い、内面に稜をもつ。口唇部は平坦に仕上げる。916は口唇部を丸く収め、内外面ともミガキによる器面調整である。917は、短く外反する口縁部の端部をさらに外側へひねり出す。胎土は赤褐色であるが、器面だけは黒褐色を呈する。918の口唇部は、内側へ折り曲げて成形する。器面調整のミガキは、丁寧である。

919~923は口縁部が直立もしくは内傾し、胴部に屈曲

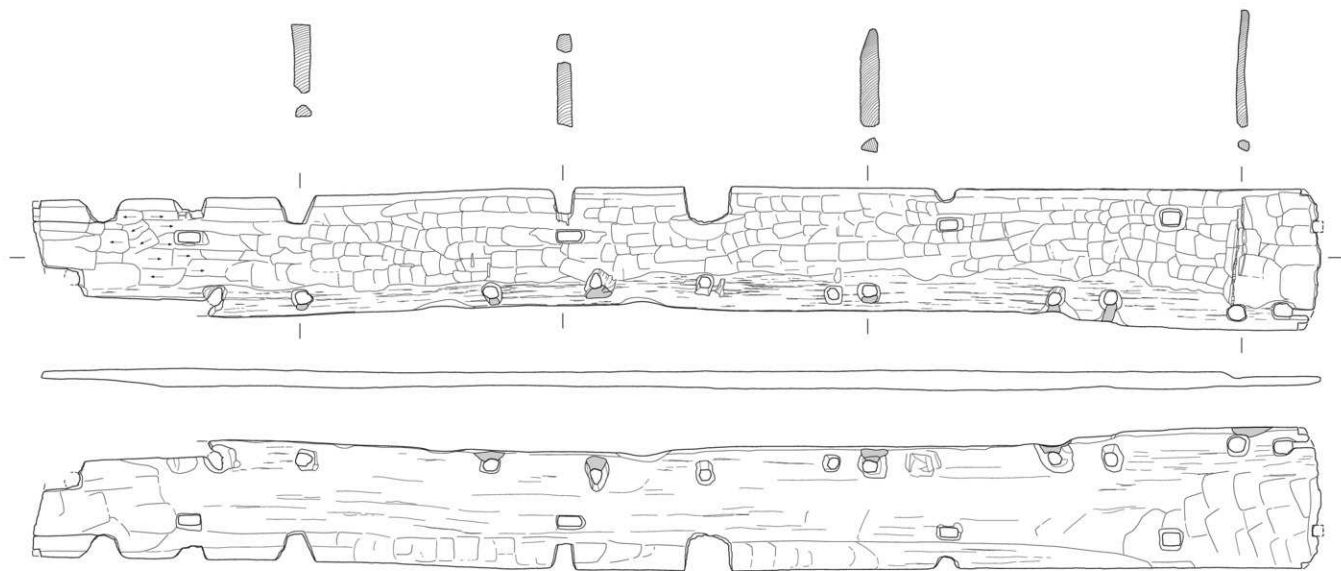
第130図 弥生時代の遺物 (26) (柄)



第131図 弥生時代の遺物 (27) (櫛子)



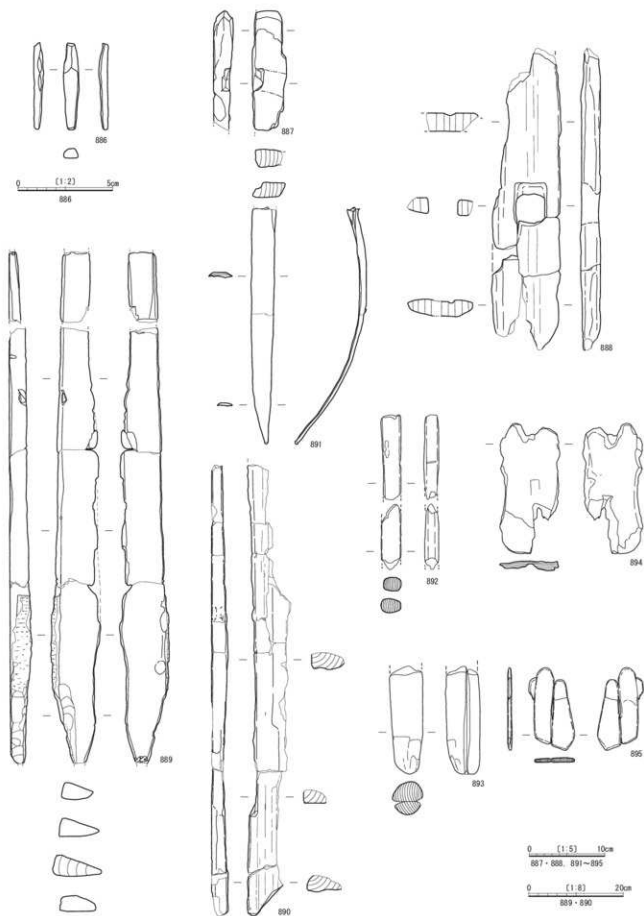
第132図 弥生時代の遺物(28)(舷側板出土状況図)



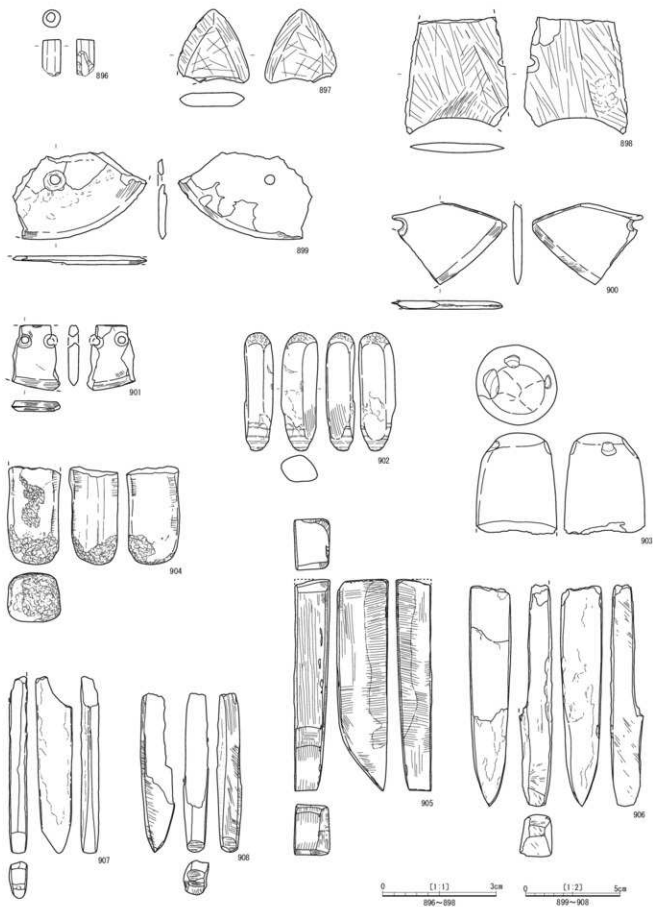
86

0 1.9 25cm

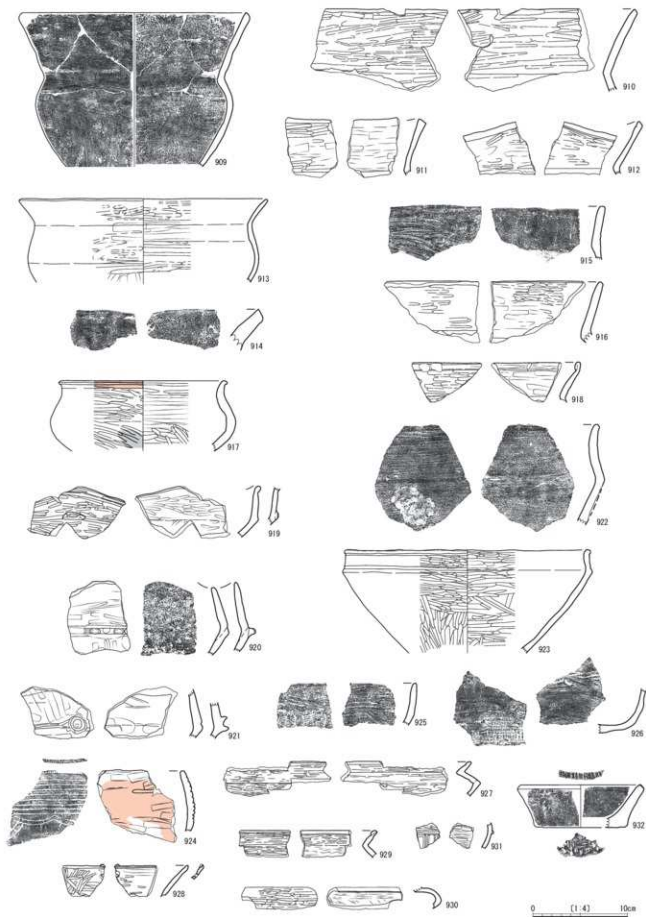
第133図 弥生時代の遺物 (29) (絃側板)



第134図 弥生時代の遺物 (30) (その他の木製品)



第135図 弥生時代の遺物 (31) (石器)



第136図 縄文時代晩期の遺物（1）（土器）

第25表 弥生・古墳時代遺物観察表（土器・土製品）(3)

地区番号	埋蔵番号	出土区	層位	形状	部位	時代	分類	法量 (cm)			形状		文様		色澤		土質							備考			
								口径	底径	高さ	外周径	内周径	外周	内周	焼成	肌色	口内	口外	口底	口縁	口内	口外	小片		その他		
105	545	C-19	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	1c	-	-	-	ナデ	前後径, ナデ	刻点	黒褐色	に濃い 黒褐色	良好	○	○	○							スス	
	546	C-17	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	1c	-	-	-	ナデ	ナデ, 前後径	刻点	に濃い 黒褐色	反黒褐色	良好	○	○	○	○						スス	
	547	E-15	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	1c	-	-	-	ナデ	ナデ	刻点	黒褐色	に濃い 黒褐色	良好	○	○	○		○						
	548	D-21	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	1c	-	-	-	ナデ	ナデ, 前後径	刻点	反黒褐色	黒褐色	良好	○	○	○							スス	
	549	D-26	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	1c	24.2	-	10.0	ナデ	ナデ, 前後径	刻点	黒褐色	黒褐色	良好	○	○	○							スス	
	550	C-26 D-25	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	1c	-	17.0	10.0	ナデ	ナデ	刻点	黒褐色	明褐色	良好	○	○	○							スス 白土	
	551	E-18	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	1c	-	-	-	ナデ	ナデ	刻点	黒褐色	に濃い 黒褐色	普通	○	○	○								
	552	D-18	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	1c	-	-	-	ナデ	ナデ	刻点	赤褐色	黒褐色	手洗	○	○	△							スス	
	553	C-26	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	1c	-	-	-	ナデ	ナデ	刻点	に濃い 黒褐色	に濃い 黒褐色	普通	○	○	○								
	106	554	D-19	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	1c	-	-	-	ナデ	ナデ	刻点	に濃い 黒褐色	反黒褐色	普通	○	○	○							
555		D-21	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	1c	-	-	-	ナデ, 前後径	ナデ, 前後径	刻点	に濃い 黒褐色	に濃い 黒褐色	やや手洗	○	○	○							赤色顔料	
556		E-19	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	1c	-	-	-	ナデ, 前後径	ナデ, 前後径	刻点	に濃い 黒褐色	に濃い 黒褐色	やや手洗	○	○	○							赤色顔料	
557		D-18	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	1c	-	-	-	ナデ	ナデ	刻点	反黒褐色	に濃い 黒褐色	普通	○	○	○								
558		C-17	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	1c	-	-	-	ナデ, 前後径	ナデ	刻点	に濃い 黒褐色	明褐色	良好	○	○	○								
559		F-14	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期後半	1c	-	-	-	ナデ	ナデ, 前後径	刻点	に濃い 黒褐色	に濃い 黒褐色	良好	△	○	○							黒色顔料	
560		D-21	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	1c	-	-	-	ナデ	ナデ	刻点	に濃い 黒褐色	に濃い 黒褐色	良好	○	○	○		○	△					
107		561	D-28	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2a	-	-	-	ナデ	ナデ	刻点	反黒褐色	に濃い 黒褐色	やや手洗	○	○	△	○						
		562	D-25	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	2a	-	-	-	ナデ	ナデ, 前後径	刻点	に濃い 黒褐色	に濃い 黒褐色	普通	○	○	○							
		563	E-25	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2a	-	-	-	ナデ	-	刻点	反黒褐色	-	良好	○	○	○							
	564	C-25	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	2a	-	-	-	ナデ	ナデ, ミガキ	刻点	反黒褐色	黒褐色	良好	○	○	△								
	565	C-25 D-26	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2a	24.0	-	10.0	ナデ, 前後径	-	刻点	黒褐色	明褐色	普通	○	○	○								
	566	C-23	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	2a	-	-	-	ナデ	ナデ	2重刻点	黒褐色	に濃い 黒褐色	普通	○	○	○								
	567	D-22	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	2b	-	-	-	ヘラナデ	ナデ	刻点	反黒褐色	黒褐色	良好	○	○	○								
	568	E-19	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2b	-	-	-	ナデ	ナデ	刻点	黒褐色	黒褐色	良好	○	○	○								
	569	D-22 D-23	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2c	20.0	-	10.0	ナデ	ナデ, 前後径	刻点	反黒褐色	明褐色	良好	○	○	○		○	○					
	108	570	C-25 D-25	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	2c	-	-	-	ナデ	-	2重刻点	黒褐色	に濃い 黒褐色	普通	○	○	○							
571		E-18	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期後半	2c	-	-	-	条痕・丁寧なナ デ	ミガキ	刻点	黒褐色	に濃い 黒褐色	良好	○	○	○								
572		C-25 C-26	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2c	-	-	-	ナデ	ミガキ, ナデ	刻点	反黒褐色	黒褐色	良好	○	○	○								
573		C-26	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2c	-	-	-	ナデ	条痕	刻点	黒褐色	に濃い 黒褐色	普通	○										
574		D-25	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2c	-	-	-	条痕	丁寧なナデ	刻点	反黒褐色	黒褐色	良好	○	○	○							赤色顔料	
575		C-19	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2c	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ	刻点	明褐色	黒褐色	普通	○										
576		E-19	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2c	-	-	-	ナデ	ミガキ, ナデ	刻点	黒褐色	に濃い 黒褐色	良好	○	○	△							スス	
577		F-15	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期後半	2c	-	-	-	ナデ	ナデ	刻点	明褐色	に濃い 黒褐色	良好	○									スス	
109		578	C-25 D-26	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2d	25.0	-	10.0	ナデ	ナデ, 前後径	刻点	明褐色	明褐色	良好	○	○	○	△						
		579	B-14	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2d	-	-	-	ナデ	ナデ	刻点	に濃い 黒褐色	に濃い 黒褐色	良好	○									
	580	D-25	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2d	-	-	-	ナデ	ナデ, 前後径	刻点	黒褐色	黒褐色	普通	△	○									
	581	C-25	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	2d	-	-	-	ナデ	ナデ, 前後径	刻点	黒褐色	に濃い 黒褐色	良好	○	○	○								
	582	D-21	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2d	-	-	-	ナデ, 前後径 ミガキ	ナデ, 前後径	刻点	反黒褐色	に濃い 黒褐色	良好	○	○	○								
	583	D-23	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2d	-	-	-	ナデ	ナデ, 前後径	刻点	黒褐色	黒褐色	良好	○	○	○								
	584	D-25	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2d	-	-	-	ナデ	ナデ	刻点	反黒褐色	に濃い 黒褐色	普通	○	○	○								
	585	C-13	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代 前期前半	2d	-	-	-	ナデ, 前後径	ナデ, 前後径	刻点	反黒褐色	黒褐色	普通	○	○	○								
	586	C-26	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2d	-	-	-	ナデ	ナデ	刻点	黒褐色	明褐色	普通	○	○	○								
	587	D-27	Ⅱ	Ⅱ	口縁部	弥生時代	2d	-	-	-	ミガキ, ナデ	ナデ	刻点	反黒褐色	に濃い 黒褐色	普通	△	○	○								

第30表 弥生・古墳時代遺物観察表(土器・土製品)(8)

地区	発掘番号	出土区	層位	形状	用途	時代	分類	寸法(cm)			重量		装束		文様		胎土		加工					備考
								口径	底径	高さ	外周径	内周径	内容	外周	内周	横切	直切	打痕	打痕	打痕	打痕	打痕	打痕	
122	770	D-21	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱc	15.6	-	(5.1)	ナズ	ナズ	2枚流	施	灰質	普通	○	○	△	○			内張り 程度	
	771	C-20	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱc	12.1	-	(4.6)	ナズ, 三ガキ	ナズ	-	にじい 異焼	にじい 異焼	良好	○	○	△	○				
	772	D-20	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱc	-	-	-	三ガキ	三ガキ	沈積	施	黄	普通	○	△	△	○				
	773	D-18	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱc	-	-	-	ナズ, 三ガキ	三ガキ	1枚流	にじい 異焼	にじい 異焼	良好	○	○	○	○			内張り	
	774	D-19 D-20	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱc	27.6	-	(3.4)	ナズ, 三ガキ	ナズ, 三ガキ	底片	施	黄	普通	○		△					
	775	D-18	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱc	40.0	-	(2.9)	ナズ, 三ガキ	ナズ, 三ガキ	-	にじい 異焼	にじい 異焼	普通	○		○	○				
	776	D-22	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱc	-	-	-	三ガキ	ナズ	底片, 取	にじい 異焼	にじい 異焼	良好	○	○	△	○				
	777	D-22	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱc	-	-	-	ナズ	ナズ	竹葉文	施	施	良好	○	○	○	○				
	778	D-23	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱc	-	-	-	ナズ	ナズ	底片	にじい 異焼	にじい 異焼	普通	○		△	○			赤色顔料	
	779	C-19	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱd	-	-	-	三ガキ	ナズ, 三ガキ	-	施	施	良好	○		○	○				
	780	C-21	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱd	-	-	-	三ガキ, 柳葉 文	ナズ	2枚交	にじい 異焼	にじい 異焼	良好	△	○						
	781	○-21	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期	Ⅱd	-	-	-	三ガキ, ナズ	三ガキ, ナズ	底片	にじい 異焼	にじい 異焼	良好	○	○	○	○				
	782	B-14	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代	Ⅱd	-	-	-	ナズ	ナズ	黄	明黄焼	灰白	普通	○	○	○	○				
	783	C-21	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱd	-	-	-	ナズ, 三ガキ	ナズ, 三ガキ	底片	施	施	良好	○	○						
	784	D-21	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代	Ⅱd	-	-	-	三ガキ, ナズ	ナズ, 柳葉文	底	施	施	良好	○	○	○	○				
	785	C-19	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱd	-	-	-	ナズ, 柳ナズ	ナズ, 三ガキ	割目交	にじい 異焼	にじい 異焼	良好	○	○						
	786	C-25	Ⅱ	底	底面	弥生時代 前期後半	Ⅱd	-	-	-	三ガキ, ナズ	ナズ, 三ガキ	割目交	にじい 異焼	施	良好	○	○	△					
	787	C-22	Ⅱ	底	底面	弥生時代	Ⅱd	-	-	-	ナズ	ナズ, 三ガキ	竹葉文, 割目	施	施	良好	○							
788	D-14 E-14	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱd	-	-	-	ナズ, 三ガキ	ナズ, 三ガキ	交 5枚流	施	施	良好	○	○	○	△					
789	C-18 C-20	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期後半	Ⅱe	24.6	-	(7.3)	ナズ, 柳ナズ ハナズ	ナズ, ナズ	-	にじい 異焼	にじい 異焼	良好	○	○	○	○			赤色顔料		
790	C-22	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 中期	Ⅱe	-	-	-	三ガキ	ナズ, 三ガキ	-	施	にじい 異焼	良好	○	○	○	○			赤色顔料		
791	D-20	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 中期	Ⅱe	13.4	-	(4.1)	ナズ	ナズ	-	施	明赤焼	良好	△	△					○		
792	D-20	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 中期	Ⅱe	18.2	-	(3.5)	ナズ	ナズ, 三ガキ	-	施	明赤焼	普通	○	○	△				赤色顔料		
793	D-21	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 中期	Ⅱe	16.4	-	(4.6)	ナズ, ハナズ	ナズ, ケズリ	-	施	透黄焼	良好	○	○	○						
794	C-27	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期	Ⅱf	-	-	-	ナズ, 三ガキ	ナズ	-	施	施	普通	○	○	○	○			赤色顔料		
795	E-17	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代 前期	Ⅱf	-	-	-	三ガキ, ナズ	三ガキ, ナズ	-	施	にじい 異焼	普通	○	○					赤色顔料		
796	C-26 D-27	Ⅱ	底	口縁部	弥生時代	Ⅱg	-	-	-	三ガキ, 柳葉 文	ナズ, 柳葉文	流し交 (4枚交)	にじい 異焼	明赤焼	良好	○	○							
797	C-20	Ⅱ	底	底面	弥生時代	Ⅱg	-	-	-	ナズ	ナズ, 柳葉文	MPP交	施	施	良好	○		○						
798	C-20	Ⅱ	底	底面	弥生時代	Ⅱg	-	-	-	ナズ, ケズリ	ナズ, 柳葉文	黄文	透黄	黄	良好	○	○							
799	D-18	Ⅱ	底	底面	弥生時代	-	10.4	(5.7)	三ガキ, ナズ	柳葉文, ナズ	-	施	施	良好	○	○	○					赤色顔料		
800	E-18	Ⅱ	底	底面	弥生時代 前期	-	5.6	(2.7)	三ガキ	三ガキ, 柳葉 文	-	にじい 異焼	にじい 異焼	良好	○	○	△							
801	D-27	Ⅱ	底	底面	弥生時代 前期	-	4.8	(2.4)	ナズ, 三ガキ	ナズ, 三ガキ 柳葉文	-	黄	黄	良好	○	○	○	○						
802	D-25	Ⅱ	底	底面	弥生時代 前期	-	-	-	-	柳葉文, ナズ	-	-	赤	赤	普通	○		○				赤色顔料		
803	E-14	Ⅱ	底	底面	弥生時代 前期	-	9.3	(3.4)	ナズ, 三ガキ	三ガキ, ケズリ	-	にじい 異焼	にじい 異焼	良好	○	○	○							
804	D-27	Ⅱ	底	底面	弥生時代 前期	-	9.0	(2.2)	三ガキ	三ガキ	沈積	黄	黄	良好	○	○	○	○						
805	D-19	Ⅱ	底	底面	弥生時代	-	8.8	(5.1)	ナズ, 柳葉文	ナズ	-	施	にじい 異焼	良好	○	○	△	○				厚孔 白焼土		
806	E-16	Ⅱ	底	底面	弥生時代 前期	-	5.2	(3.7)	三ガキ	ナズ	-	赤	にじい 異焼	良好	○	○	○	○						
807	D-18	Ⅱ	底	底面	弥生時代	-	7.4	(3.8)	三ガキ	ナズ, 柳葉文	-	赤	明赤焼	良好	○	○	○	○				スス		
808	C-23	Ⅱ	底	底面	弥生時代	-	5.0	(3.0)	ナズ, 三ガキ	ナズ, 三ガキ	流	黄	オリーブ 文	普通	○	○	○	○						
809	C-18	Ⅱ	底	底面	弥生時代 前期	-	11.4	(4.7)	三ガキ, ナズ	ナズ	-	明赤焼	にじい 異焼	良好	○	○	○	○						
810	B-14	Ⅱ	底	底面	弥生時代 前期	-	5.4	(3.8)	ナズ, 三ガキ	ナズ, 三ガキ	-	にじい 異焼	にじい 異焼	良好	○	○	△							
811	C-21	Ⅱ	底	底面	弥生時代	-	8.2	(3.6)	三ガキ	三ガキ	-	施	明赤焼	良好	○	○	○							
812	D-23	Ⅱ	底	底面	弥生時代 前期	-	5.0	(3.8)	三ガキ	ナズ, 柳葉文	-	施	黄	良好	○		○	△	○			白焼土		
813	C-19	Ⅱ	底	底面	弥生時代	-	5.8	(2.7)	ヘラナズ	-	-	灰質	灰質	良好	○	○	○	○						
814	E-14	Ⅱ	底	底面	弥生時代 前期	-	4.8	(2.8)	柳葉文, ナズ	ナズ	-	にじい 異焼	にじい 異焼	良好	○	○	○	○						

第31表 弥生・古墳時代遺物観察表(土器・土製品)(9)

地区 番号	埋蔵 番号	出土区	層位	形状	単位	時代	分析	重量(g)			高径(mm)			口径(mm)		底径(mm)		底面		底面		底面		備考	
								口徑	底徑	底厚	口徑	底徑	口徑	底径	口徑	底径	口徑	底径	口徑	底径	口徑	底径	口徑		底径
124	815	D-21	Ⅱ	笠	底部	弥生時代 前期	-	-	9.0	6.1	ナブ, ハケメ 土器	ナブ, ミガキ	-	に染い ぬ	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○	○		
	816	D-22	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ	ナブ, 煎餅瓦 交差	ナブ, ミガキ	-	に染い ぬ	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	817	E-17	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ	ナブ, 煎餅瓦 交差	ナブ, ミガキ	-	に染い ぬ	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	818	D-25	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ, 煎餅瓦 交差	ナブ	煎餅瓦 交差	ナブ, ミガキ	-	に染い ぬ	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○	
	819	C-18	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ	ナブ, 煎餅瓦 交差	ナブ	煎餅瓦 交差	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○	○	スス	
	820	C-19	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ, 煎餅瓦 交差	ナブ, 煎餅瓦 交差	煎餅瓦 交差	ナブ, ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○	スス	
	821	E-21	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ	ナブ	交差	ナブ, ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○	赤色顔料	
	822	C-16	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ, ミガキ	ミガキ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	823	C-26 D-25	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	17.2	-	6.1	ミガキ	ミガキ	-	煎餅瓦 交差	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○	○	罫線瓦	
	824	C-26 D-24	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	20.0	-	6.3	ナブ, ミガキ	ナブ, ミガキ	-	煎餅瓦 交差	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○	△		
	825	D-18 D-19	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	15.4	-	6.4	ナブ, ミガキ	ナブ, ミガキ	-	煎餅瓦 交差	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○	○		
	826	D-19	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	20.0	-	6.9	ミガキ, ナブ	ナブ	交差	ナブ, ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○	スス	
	827	D-30	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ミガキ	ナブ, ミガキ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	828	E-18	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ミガキ	ナブ, ミガキ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	829	D-25	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	15.7	-	13.2	ナブ	ナブ	煎餅瓦 交差	ナブ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	△	スス	
	830	C-26	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ, ミガキ	ナブ	交差	ナブ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	831	D-21	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ミガキ	ミガキ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	832	C-20	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ミガキ	ナブ, ミガキ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	△	○	
	833	D-25	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ, ミガキ	ナブ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	834	D-18	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ	ナブ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	835	D-25	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	13.5	-	13.7	ナブ, ミガキ	ナブ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	836	E-19	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	6.5	-	12.0	ナブ	ナブ	-	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	837	C-21	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ, ミガキ	ナブ, ミガキ	交差	ナブ, ミガキ	-	に染い ぬ	良好	△	○	○	○	○	○	△	
	838	E-18	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ミガキ	ナブ	-	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	839	O-22	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ, ミガキ	ナブ, ミガキ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	840	C-19	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	7.2	-	13.0	ミガキ, ナブ ケズリ	煎餅瓦, ナブ	-	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	△	○	○	○	○	○	赤色顔料	
	841	C-26	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	15.4	-	12.6	ミガキ	ミガキ	沈着	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	△	○	○	○	○	△	赤色顔料	
	842	D-25	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ, ミガキ	ナブ, ミガキ	沈着	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	843	O-17	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ミガキ	ミガキ	-	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	△		
	844	D-24	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ミガキ	ミガキ	-	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	845	C-24	Ⅱ	鉢	底部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ, ミガキ	ナブ	-	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○		
	846	E-15	Ⅱ	鉢	底部	弥生時代 前期	-	-	8.4	12.3	ナブ	ナブ	煎餅瓦 交差	ナブ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	△		
847	C-23	Ⅱ	鉢	底部	弥生時代 前期	-	-	8.0	13.1	ナブ, ミガキ	ナブ, ミガキ	-	ナブ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○			
848	C-22	Ⅱ	鉢	底部	弥生時代 前期	-	-	7.8	13.5	ナブ	ナブ, 煎餅瓦 交差	-	ナブ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○			
849	C-18	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ	煎餅瓦, ナブ	-	ナブ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	△	スス		
850	D-21	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ミガキ	ナブ, ミガキ	-	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	△			
851	D-21	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ミガキ, ナブ	ミガキ, ナブ	-	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○			
852	C-25	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ハケメ, ミガキ	ハケメ, ナブ	-	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○			
853	C-12	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ	ナブ	-	ナブ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○	赤色顔料		
854	C-18	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	6.0	-	13.6	ナブ	ナブ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	△	○			
855	D-17	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	8.8	17.3	ナブ, ミガキ	ナブ, ミガキ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○			
856	C-25 D-26	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ミガキ, ナブ	ナブ, ケズリ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○			
857	C-18 D-19	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ	ナブ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○			
858	C-25 D-25	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ, ケズリ	ナブ, ケズリ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○			
859	C-27	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代 前期	-	-	-	-	ナブ	ナブ	交差	ミガキ	-	に染い ぬ	良好	○	○	○	○	○	○			

第33表 弥生・古墳時代遺物観察表（木製品）

採掘 番号	発掘 番号	出土区	層位	器種	素材	法量 (mm)			備考
						最大径	最大幅	最大厚	
104	526	E-9	-	紡織物	カヤ	43.8	74.5	1.5	JEFFNo.88
	527	B-13	Bb	紡織物	-	36.9	9.2	2.2	JEFFNo.81
	528	C-10	Bb	陶器木製品	カヤ	37.0	14.3	1.5	JEFFNo.43
128	669	C-10	Bb	三叉鏃	コナラ属 アカガシ香葉	51.6	9.7	2.0	JEFFNo.40
	670	D-11	B	三叉鏃	コナラ属 アカガシ香葉	50.0	5.5	2.0	JEFFNo.51
	671	D-13	-	三叉鏃	コナラ属 アカガシ香葉	36.0	5.0	2.0	JEFFNo.46
	672	-	Ba	鏃	コナラ属 アカガシ香葉	6.6	6.6	2.6	JEFFNo.50
	673	F-10	B	鏃	イスノキ	(29.4)	(4.5)	2.6	JEFFNo.89
	674	C-10	Bb	鏃	イスノキ	36.5	14.3	2.2	JEFFNo.41
	675	-	Bb	鏃	イスノキ	46.4	7.2	1.5	JEFFNo.44
129	676	D-10	-	柄	イヌマキ	92.0	3.0	4.0	JEFFNo.52
	677	B-10	Bb	柄(環状物?)	ゴマズミ属	51.0	3.8	4.5	JEFFNo.42
	678	C-11	Bb	柄	クスノキ科	41.0	3.0	3.5	JEFFNo.45
130	679	B-11	Bb	骨柄鏃	クスノキ科	7.0	7.8	3.6	JEFFNo.35-No.91
	680	D-10	-	部材(二又)	-	11.6	7.7	4.5	JEFFNo.96
	681	C-11	-	二又部材	コナラ属 アカガシ香葉	55.0	10.0	6.3	JEFFNo.82
131	682	B-9	Bb	棒子	マキ属	74.4	6.4	6.0	JEFFNo.39
	683	C-9	B	棒子	マキ属	56.0	6.7	8.0	JEFFNo.48
	684	B-10	Bb	棒子	グリ	38.9	7.0	9.7	JEFFNo.84
133	685	D-E-10-11	Bb	板状物	カヤ	272.5	30.5	4.7	JEFFNo.54-No.55-No.56
	686	D-9	Bb	木鏃	イスノキ	4.6	0.9	0.5	JEFFNo.53
134	687	D-9	-	板(厚丸)	イタイガシ	15.6	4.5	2.5	JEFFNo.67
	688	D-8	-	板(厚丸)	-	35.6	8.9	2.7	
	689	C-10	-	板・部材	ツブラジイ	69.9	10.4	4.6	JEFFNo.85
	690	D-9	-	部材	-	95.2	6.0	3.4	
	691	C-11	-	三叉鏃	コナラ属 アカガシ香葉	31.4	3.2	1.1	JEFFNo.80
	692	D-8	-	柄	クスノキ科	(38.8)	2.6	2.0	
	693	B-C-10-11	-	製品?	タニワタリノキ	14.2	4.4	4.6	JEFFNo.79
	694	E-10	B	鏃	グリ	19.2	7.9	1.3	JEFFNo.71
	695	C-10	-	部材	イスノキ	10.9	6.1	0.6	JEFFNo.78

第34表 弥生・古墳時代遺物観察表（石器・石製品）

採掘 番号	発掘 番号	出土区	層位	器種	石材	法量 (cm)			重量 (g)	備考
						最大径	最大幅	最大厚		
135	696	C-20	B	磨玉	磨玉	1.0	0.50	0.50	0.25	
	697	B-22	B	磨製石鏃	砂岩	(1.95)	(1.90)	0.25	1.49	
	698	D-25	B	磨製石鏃	ホルンフェルス	(3.95)	2.70	0.25	3.10	
	699	C-18	B	石筭丁	頁岩	14.60	(7.10)	0.45	16.32	
	900	D-26	B	石筭丁	頁岩	(4.30)	6.10	0.45	15.40	
	901	D-18	B	石筭丁	ホルンフェルス	(3.45)	(2.55)	0.55	6.19	
	902	D-26	B	棒状石鏃	砂岩	6.25	1.95	1.40	24.58	
	903	F-14	Ba	棒状石鏃	灰山岩	(5.40)	(4.25)	4.25	145.27	
	904	E-19	B	塚石	灰山岩	(5.20)	(2.80)	2.60	66.85	
	905	D-21	B	柱状片刃石筭	頁岩	11.20	1.90	2.70	112.53	
	906	F-F-12-13	Ba	柱状片刃石筭	ホルンフェルス	(11.70)	(1.70)	2.20	67.13	
	907	D-20	B	柱状片刃石筭	ホルンフェルス	(9.35)	(9.95)	1.95	26.20	
	908	E-12	B	柱状片刃石筭	ホルンフェルス	(8.40)	(1.30)	1.80	20.55	

一引用・参考文献一

文化庁文化財部記念物課2010『発掘調査のてびき』

【4章】

上田秀夫1982「14～15世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2日本貿易陶磁研究会

小野正敏1982「14～16世紀の染付碗皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2日本貿易陶磁研究会

大阪府立狭山池博物館2001「開館記念特別展 古代の土木技術」

大阪府立狭山池博物館2017「常設展示案内」

大阪府立狭山池博物館2020「令和2年度特別展 発掘された土木技術 大和川流域の開発と木製」

鹿児島県立埋蔵文化財センター2007「持原松遺跡」

鹿児島県立埋蔵文化財センター2012「芝原遺跡3」

鹿児島県歴史資料センター黎明館2014「南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州」

中世土器研究会1995「概説 中世の土器・陶磁器」

東京消防庁 新宿区四谷三丁目遺跡調査団「江戸遺跡検出のやまの分類」『四谷三丁目遺跡』別冊

奈良国立文化財研究所1993「木器集成図録」古代篇『史料第36冊』奈良国立文化財研究所

日本陶磁器研究会2020「貿易陶磁研究」No.40

日本貿易陶磁研究会2019「南九州から奄美群島の貿易陶磁」第40回日本貿易陶磁研究会研究集会 発表要旨・資料集

福岡市教育委員会1995「窯房遺跡2・3」

MIHO MUSEUM 美城陶芸美術館 愛知陶磁資料館 福井県陶芸館 山口県立萩美術館・浦上記念館2010「古陶の講中世のやまの-六古窯とその周辺-」

森田勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2日本貿易陶磁研究会

山本信夫2000「太宰府条坊XV 陶磁器分類篇」太宰府の文化財第49集太宰府市教育委員会

山本信夫2010「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」『貿易陶磁研究』No.30日本貿易陶磁研究会

【5章】

一瀬和夫1992「弥生船の復原」『弥生文化博物館研究報告』第1集大阪府立 弥生文化博物館

岩本才次2006「昔の日本の船事情」『日本航海学会誌 NAVIGATION』164号

大阪府教育委員会2010「郡原北遺跡I」

大阪府教育委員会2012「郡原北遺跡II」

大阪府教育委員会2013「砥波北遺跡II」

大阪府立弥生文化博物館2013「弥生人の船-モンゴロイドの海洋世界-」平成25年度夏期特別展

鹿児島県立埋蔵文化財センター2012「稲荷遺跡」

鹿児島県立埋蔵文化財センター2009「市ノ原遺跡（第3地点）」第Ⅲ分冊

鹿児島県立埋蔵文化財センター2013「芝原遺跡4」

鹿児島県歴史資料センター黎明館1990「所藏品目録(Ⅶ)考古」
鹿児島大学総合研究博物館2015「成川式土器ってなんだ？-鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器」

川口雅之2019「薩摩半島南部西海岸における弥生時代早期の編年」『鹿児島考古』第49号鹿児島県考古学会

久住猛雄2018「九州島の古式土器の併行関係-弥生時代終末期-古墳時代中期初頭の九州島における広域編年-」『集落と古墳の動態Ⅰ-弥生時代終末期-古墳時代前期-追加資料』九州前方後円墳研究会鹿児島大会事務局

財団法人大阪府文化財センター1987「久宝寺南」

財団法人大阪府文化財センター2009「讚良部条里遺跡Ⅱ」

財団法人静岡原埋蔵文化財調査研究所「角江遺跡Ⅱ 遺物篇2（木製品）」

財団法人東広島市教育文化振興事業団2005「貫輪1号遺跡発掘調査報告書」

滋賀県教育委員会2009「赤野井遺跡」第1分冊（本文編1）

柴田昌見2017「準構造船考」考古学研究会岡山6月例会資料

塚本浩司2014「郡原北遺跡出土準構造船の舷側板とフェンダについて」『大阪文化財研究』第45号公益財団法人大阪府文化財センター

塚本浩司2014「郡原北遺跡出土準構造船の接合方法について」『弥生文化博物館研究報告』第7集大阪府立弥生文化博物館

中村直子1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号鹿児島大学法文学部考古学研究室

中村弘2008「播磨・長門遺跡出土の準構造船板について」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第1号兵庫県立考古博物館

中村弘2012「古墳時代準構造船の復元」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第5号兵庫県立考古博物館

奈良国立文化財研究所1993「木器集成図録」近畿原始篇『史料第36冊』奈良国立文化財研究所

深澤芳樹2014「日本列島における原始・古代の船舶関係出土資料一覽」『国際常民文化研究叢書5』

藤尾慎一郎 坂本悠 東和幸2013「志布志市稲荷遺跡出土弥生前期突帯土器の年代的調査-大隅半島の弥生前期の実年代-」『縄文の森から』第6号鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要・年報

横田洋三2004「準構造船ノート」『紀要』第17号財団法人滋賀県文化財保護協会

横田洋三2014「組み合せ式船体の船」『紀要』第27号公益財団法人滋賀県文化財保護協会

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (217)
国道 270 号 (宮崎バイパス) 道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3

中津野遺跡

低地部・低湿地部編

(第 1 分冊)

発行年月 2022年3月
編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811

印刷 斯文堂株式会社
〒891-0122 鹿児島市南栄2丁目12番地6
TEL 099-268-8211 FAX 099-269-5198

